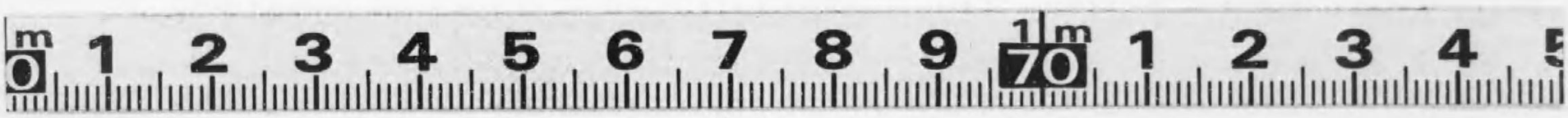
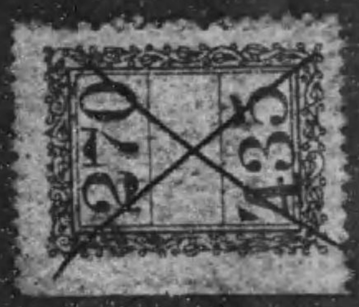
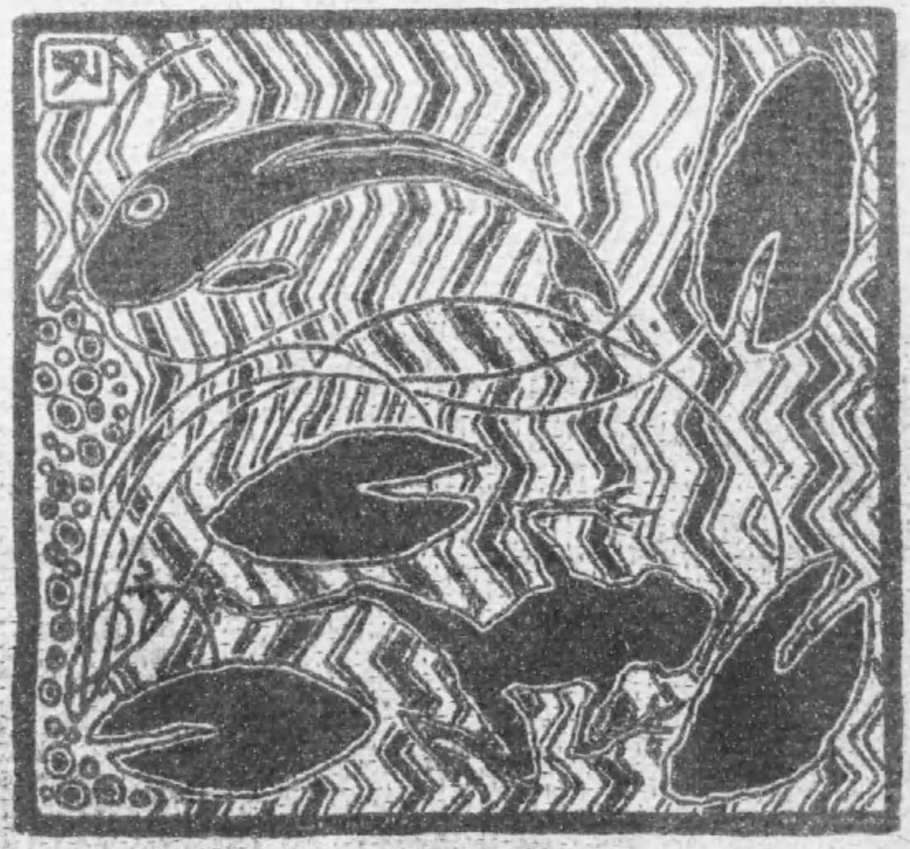
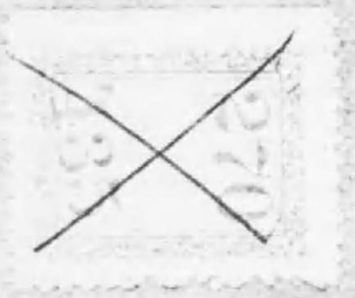
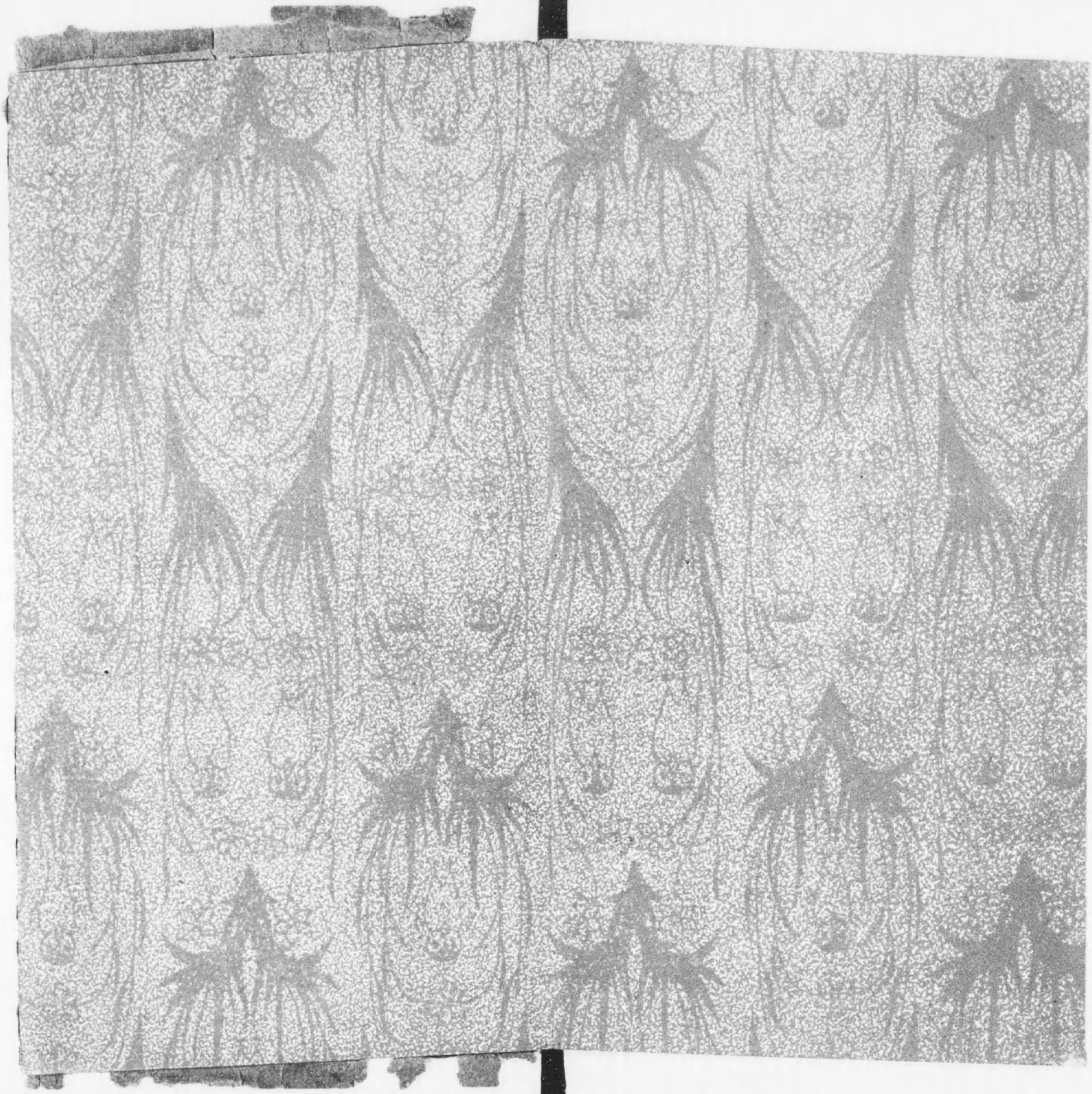

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1m 70 1 2 3 4 5


270
435



海





特109
213

現代文藝叢書

第十六編

内容

小說

溝

大正
1.10.22.
内交

外套を着たまゝ、眞田は座蒲團の上に、あぐらをかいてゐた。开してモデルになつてゐる時の心もちを、しんみり味つてみたいと力めて體の固くなるのを壓へてゐた。

『どうしても、全體に若らしい感じが出ない。止さう。』正木は刷毛を放り出して、ゴロリと横になつた。若々しい白い額には、疳癪持らしい筋

がピク〳〵と波うつてゐる。

『もつと描き給へ。僕は此繪の具の香ひを嗅いでゐるだけでも氣持がいいんだ。年暮らしくないよ。それに此濃艶な美人を暗い色で塗り潰して、僕の顏が出來るのが堪らなく嬉しい。切めて眼でも入れてくれ。』眞田は自分の顏の輪廓と、廣い額が荒い筆で描れてゐる畫板を見つめた。頤のあたりには、始めかゝれてあつた若い女のふつくりした頰が仄かに殘つてゐる。

『止さう。君の感じはその額で充分だ。』正木は起きようともせぬ。

眞田は正木が飲めもせぬ酒に親しんで遂々恩人の家を追はれた時の光景をフト思ひ浮べた。氣の小さい、神經質の此男が、自分を大きく見せやうとして、力めて總てを僞る！恰度暗闇で、ひとりで威張つてゐるやうに——さうだ、斯う毒口を利いてやらうかと思つたがやめた。

繪の具の油の香ひは、強く腦を刺戟する、氣分が焦々して、此狹い室にじつとしてゐることがつまらないやうに思はれる。どこかへ行つたらのんびりした所があるやうな心地がして、眞田はふいと外に出た。

夕暮の町は氣忙しい。骨を削るやうな電車の響き、乾いた道を引ずる履物の音、車の轍や點燈夫の梯子乘、すべてが目眩しく、耳に不快に響いて、自分の心も其不快な響の中に卷込まれさうな氣がして、はら〳〵し乍らも電車に乘つた。

それでも眞田は、電車の中に溢れてゐる人々の顏を見て、ひとりびと

りに就て夫々何物かを見出さうとした。——が、どれを見ても落つかない、きよと〳〵したやうな顔付をしてゐる。どの顔を見ても〳〵、をどけた顔ばかりだ——もつともらしい八字髯もさうだ、生馬の目を抜さうな敏捷いやうな商人とてもさうだ、老人は猶更さうだ——なんてまア皆生氣のない間の伸びた、たるんだ、遊びのある顔をしてゐるのだらう——血の乾き切つたバサ〳〵した皮膚のお爺さん、お産に疲たといつたやうなおかみさん、不快に濁つた目の職人——ぐるりと見廻しても皆不快な感じを與る人間のみで、氣力の漲つてゐる、湧立つた血が觸つても垂りさうな男も女もゐなかつた。

つまらない——これから公園を歩いたつて滿足しさうな事はないやうだ——歸らう、歸つて彼女の酌で酒でも飲むとするか、自分の住む天地はどうしても彼の汚い四疊半だと見える。年暮はどこを歩いても、狂人のやうになつて了う、歸らう——眞田が坂本で電車を降りた頃には日は落て夜店のランプやカンテラが、寒い風に煽られて盛に油煙をあげてゐた。

夜店商人は、どれも炬燵の上に古毛布を被せて、道ゆく人の足許をみてゐた。眞田は案山子のやうに道具屋の前に突立つた。古時計、置物、机、古本、錦繪、瀬戸物、隅にはギアマンの瓶などもある。

紙表裝の日の出に鶴の幅にも、大黒樣の置物にも、隱れたる天才の閃きが、埃や塵に埋れ乍らも遺つてゐる。猶仔細に見れば、かうしたやう

な影は、茶碗の模様にも、燗徳利の形にも割れた如意の端にも見出すことが出來た。

きよとんとして「なァんだ」と言つたような道具屋の顔を、冷やかに見返して眞田は急ぎ足に去つた。それから萬年町の細い通をぬけて入谷の方へと迂回した。場末の町は、行く程瓦斯や電氣の強い光は尠くなつて、家毎に洋燈の暗い灯がつづく。

眞田は此暗闇に引込まるゝやうな氣がし乍らも、此暗い奥に自分を待つてゐる女があると思ふと、其女の周圍だけ明るいやうな氣がした。

二

眞田は暗い道を泥溝に添うて折れた。

泥溝は植木屋の前から湯屋のあたりまで、かなり長い。まだ住み慣れぬ眞田は、狹い道を、をづ〳〵歩いた。——夜の氣は冷えて、蛇の鱗にでも觸るやうに、襟首から慄然とする。——家の潛戸を開ける前に、前の家を覗いてみた。小僧さんがひとり、こくりこくり取散した仕事場で、居睡をしてゐるので、聲も掛けずに、潛り戸をガラリと開けた。

女はゐない——すぐ斯う家のなかの氣配で直覺した。手さぐりに闇の中を歩いて、自分と女の住んでゐる、室の開き戸をあけた。

隣りの間はコツとの音もしない。例なら奥さんが聲をかけて、女の出先などを口數多く報告してくれるのだが、今夜は留守のやうだ。——然

しわれだけの子供をぞろ〳〵伴れて何處へいつたらう――こんな事を考へ乍ら、火鉢の灰を掻くと、炭團の眞赤なのが出た。

洋燈を明くすると、膳の上に湯豆腐の用意がされて、德利には酒もたたへてあり、藥鑵の湯も沸つてゐるのが照し出された。――遲くなるから飲んで居れといふ事だな、字が下手だつて曲りなりに、置手紙でもして行けばよいに――と思ひ乍ら、炭をついで畑の用意をした。

煤けた低い天井、小さな窓、破れた疊を花吳莚で隱した此四疊半に、明るい色彩を放つものと言つては、大きな化粧鏡に被せた緋縮緬の袋ばかりである。卓子の下には炬燵や書籍が積重ねてあるが、其金ピカの書籍の蔭に三味線が袋のまゝ忍ばせてあるのが見えた。

ぐび〳〵酒を飲み出した。今夜はうんと醉つてやらう。女が困る位に醉つてやらう。どうせ年暮だ――那麽調子で飲み出した。三四本倒して、やゝ醉の廻つた頃、奥さんがぞろ〳〵子供を伴れて歸つて來た。

破れた襖が開いて、色の青い奥さんの顏が見えた。

『おや、お歸りですか。奥さんはね、先刻一寸出てくると仰言いましたよ。お友達の方と』癇高いけれども力のない聲で言つて黑い目の端の皺に愛嬌を見せた。

『有難う。』眞田は表面では斯う平氣で答へたが、心には輕い動搖を覺えた――。判らない、お妻の朋輩と言つては別にない筈だ、彼の女ほど友達を持たないものはないと、常も思つてゐたが――また此家を知つてる者

もない筈だが――眞田は酒と火氣で汗ばんだ額を撫でながら考へたが、それはほんの瞬間であつた。

――考へるのはやめよう。考へたつて判るものぢやない、自分の頭腦(あたま)は考へる!!といふやうな餘裕(ゆとり)のある頭腦ではないのだ――刹那に直覺する頭腦だ、糢索(もさく)をして樂しむやうに生憎鈍く出來てはゐない――そんな事はどうでもよい、自分の命を懸けてもよいやうな、斯う刺戟の強いことが求めたい――紅生薑(べにしやうが)も嚙んだ、辛子も舐めたが、これは酒の肴で舌にピリ、と感ずるばかりだ。何か斯う頭腦にグワンと響いて氣絶するやうな、そして心臟からどく〳〵と血が吹出るやうな刺戟の強い痛快な事はないかしら――毒口も痛快だ、冷笑するのも氣持はいゝが、然しそれは自分の血を湧き立たすやうな刺戟がないから、其反動として恁麼遊びをするのだ――さうだ、確かに之れは遊びだ、痛切に迫つた刺戟ではないのだ――何か強い刺戟が求めたい、現在の生活は戀焦れてゐる強い刺戟に觸れやうとはしてゐる――さうだ何だか、さう思はれるが圖(と)もするとライと外れて了ふ――眞田の目は濕んでとろんことしてきた。そして酒と火に蒸されてゐる頭の中で、それからそれへと旅役者から聞た、暖爐(ストーブ)の前の女の話を思ひ出した。

三

――非常に話上手な役者だつた。その役者は方々を流れ歩いたと見え

て行く先々で女に知合になつた話をしてゐた。手眞似がうまいが指に指輪の痕があつて指輪は一個もなかつた事を覺えてゐる――下らぬ事だが其晩の話を思ひ出すと、こんな事まで目の先に浮んでくる。

――私は何百人の女に關係したか知れませんが、女の肌を見てアヽ美くしいなァと思つたのはタツタ一度しかありません――それは大連での事でした、いきさつは一寸申されません、其方が却て面白いでせうから、兎に角私は物好にも西洋の女――無論堅氣の女ではありませんが、――こつそり逢ふ事になつたのです。

冬の事で、今夜の樣にうそ寒い晩でした。私は夢心地で女の室に入ると中は逆上るほど暖かで輕い頭痛を覺える位でした――女は暖爐の前の

椅子に腰を掛けて肉づきのよい腕をあらはに、小さなコップで酒を飲んでゐました。私にも飲めといひますから、一口グッと飲むと清々した氣持になりましたが、暫くすると毛穴がぱち〳〵一つ宛開いて、空氣に漂うてゐる物の音や私語の總てをも聽取さうに感覺が鋭くなりました。然しそれも暫くで、だん〴〵醉が廻ると、毛穴がしてゐる息もハタと止つて、漲つてゐる血が蒸されて、眠いやうな氣持になつて來ました。

――「醉つたの」と女が言ひます。私は骨も肉も暖い血の中にとろけるような心地でゐながら――そつと女の方を見ました。女の白い――眞白い雪のやうな肌は、ほんのりと紅をさしたやうで而も美くしい女の體は、火氣であたゝめられ、酒と血とに彩られて、爪の先から瞼毛のさきまで

美くしう光つて居りました――开して私の方を向いては、あでやかに笑ひ乍ら、子供でも弄るやうに、大きな目に物を言はせたり、白い齒を見せては迷はせました――

役者が可笑味たつぷりに話したのも恁麽意味であつた。その外の女たらしの話は愚にもつかぬ。朝鮮で逢つた旅役者の追想は之だけの記憶で充分だと思つた。

眞田はだん〳〵醉が廻つて來た。軀の節々がだるくなつて、次第に意識が朧になるやうな氣がした。今こゝで何か膽を冷すやうな痛快な事件が起るか、頭から溫い生血をザブリと浴せられたら發狂するだらう。正氣を喪つたものは哀れだといふが、彼等も亦自分の好きな天地に生きて居るのだ。寧ろ羨ましい生活をしてゐるのだ。――巢鴨病院を參觀しての歸り、停留場で足が何だか土を踏んでゐないやうな氣がして、自分で自分の正氣を疑つた事もあつた――落語家の馬樂の前後亂れた可笑しい話に引込れて心が搖いだこともあつた――痛快な刺戟に一度でもいい、ぶつかつたら巢鴨でもどこへでも行かう――眞田の頭は次第に靄に掩はれてきた。

さら〳〵窓の障子に雪の降りかゝる音がした。眞田は清涼劑でも飲だやうな清々しい氣持になつて、窓をサッと開けた。暗の中に雪がちら〳〵降つてゐる。

カタ〳〵〳〵、入口で下駄を鳴らす音がした。お妻かしら？矢張お妻

だつた。開き戸から目の大きな白い顔が見えた。

『もう酔つちやつたの』女は疲れたといふ物腰で上つて來た。鼻の先が寒さに少し赤くなつてゐる。

『飲め、酔つて鏡を見ろ』盃を差した眞田の手は痙攣するやうに慄へてゐる。

『あたし、酒はいや、何で鏡を見るの』『酔つて鏡にうつしたら、少しは皺も伸びて見えやうてのさ』眞田は未だ旅役者の話を幻に描いてゐる。

『お婆さんな事は、始ッから知つてる癖に、酔ふとすぐ之れだよ。』

『ほう、面白い、膨れたな、さう膨れずに一杯やれ。飲まねば之れを食へ。』眞田はぐつ〳〵煮えこゞつてゐる鍋の豆腐を箸で挿まうとしたが、何度やつても豆腐は崩れた。

女は聲を忍ばせて笑つてみてゐた。

四

翌る朝、眞田が目を覺した時には、女は枕許に坐つて煙草をのんでゐた。そしてお化粧もし髪も亂れてゐなかつた。

『降てるかい？』眩しい目をして聞いた。

『お日樣が笑つてますよ。』女は高い鼻の穴から巧みにふうと煙を吹いた。其煙が大きくとつた前髪の中に、もや〳〵と流れ込んだ。

眞田は床の中で、今日も何か變つた事はないかしら、と先づ夫れを思

つた。頭がチク〳〵痛む、自分の吐く息の臭ひで、昨夜の酒の氣がまだ殘つてゐることを知つた。

『一ぱんつけてくれないか。』蒲團の中に頭を潜り込ませたまゝ、賴むやうに言つた。心のうちでは酒でも飲んでゆつくり考へやう、女に酒を强請ることは面白いものだ、と斯う二樣に意味をつけてゐた。

『いけませんよ、昨夜あんなに飲んだぢやないの、全く毒だわ。』殊に語尾に力を入れた。女は昨日訪ねて來た德ちやんがモウ來さうなものだ。成るべくなら眞田のやうな若い男と、一緒に居るところを見せたくない——斯う思つてゐる處だつた。

『何でもつけてくれ。飲まないと氣分が惡くて動けないから。』さも氣分が惡るさうに言つた。

『ではホンの一ぱんですよ。』女は酒をまるみの柔らかい小さな德利に移した。

『其音は不景氣だね、どうもしみつたれてるよ。』眞田は酒の垂るゝ音を聞いてゐた。

『一ぱいですよ。山盛には出來ませんからね。』女は癖として古い皮肉をいつものやうに言ふ。迚もお妻には心臟をプツリと刺すやうな、新らしい皮肉は言へないんだ、それだけをつとりしてるんだ——其都度眞田は斯う思ひ乍ら聞てゐた。

『はい〳〵、恐れ入谷の此家は五百六十五番地。』眞田も古い地口を言つ

て、酒の煮る香を嗅ぎ乍らはしやぎ出した。『何にしても今朝は馬鹿に早いね、お日様が笑つてる頃までは年中寢てる癖に、お參詣にでも行くのかい。』

『いゝえ。』一寸考へて、寧そ言つて了はうと思ひ定めて『あのね、今日古馴染が遊びに來るのよ、田舍で一緒に出てた德ちやんと云ふ——昨日一寸來たの、四五年も逢はないからッて、』

『ふうむ——今どこにゐるのかい。』眞田は女の話さないことまで讀まうとした。

『何だか萬世の近くらしいのよ。』

『藝妓はしてゐないのかい？』

『えゝ立派な御亭主があるの。』女は煙草をのんでは鼻から暢氣さうに出してゐる——眞田は手酌で一本を空にした。そしてゴロリと横になつて新聞を披げた。

裏の垣根の向ふは、植木屋の廣い花畑で、冬の日は、夏の洪水に荒された畑を力なげに照してゐた。

女は德ちやんを中心にして、昔の思ひ出に耽つてゐる——あの頃は若かつた——先づそれを思つた——大きい羽衣の江戸褄がよく似合ふと言つて何家にいつても褒められた、三味線を彈かずとも顏を出したゞけで御祝儀が貰へたし、いゝ旦那も隨分ついた。彼のいけ好かない請負師に鐵砲を喰はした時など、大した勢ひだつたが——今はほんとうに老て了

つた。昨日德ちやんが『お前さんはさう老けたやうにも見えないが、然し賴は脫け上つたね』と言つたが、全く生際なんかは昔の面影もない——彼の時分には隨分金遣も荒かつたが、今はどうだらう！眞田さんだつて、年が若くて賴りにはならないし、また何時別れて了うやら知れず——全く心細くなつて了ふ——あゝ老けもしたが氣も弱くなつたと、只とり止もなく昔戀しいやうな氣ばかりした。

隣りの時計が九時を打つた。

——德ちやんはまだ來ないよ。きつと藝者になつて手切金を拵らへるから、別れて呉れと云つて、今頃はゴタ〳〵してるに違ひない——お妻は德ちやんの遲いのは多くさうだらう、自分も恁麼味は覺えてゐるから、と思つた——然し德ちやんは羨ましい、哥兄は遊び人だと云つても、氣の小さないゝ人だし、例ひ貧乏しても人の家内と名はついてゐるし——それに三十を越しても、未だアンナに若く見えるのだもの、化粧つたらドンナに引立だらうと、荒かゝつた手を見ながら思ひ耽つてゐた。

五

眞田は漸う正午頃家を出た。

『德ちやんとやらが來るなら、宿六は早く出かけた方がいゝだらう。』出がけに笑つて斯う言ふと、女も外套を着せ乍ら『まァさうよ。』と冗談らしく言つた。开して『今日は年の市だから早くお歸んなさい。明るいう

ちに伴れてつて頂くから。』と後から媚るやうに嬌姿をした。

『判らないね、遲いやうだつたら、兄さんとでも行つたらいゝ。』斯う言ひ捨てゝ外に出た。薄日は影つて寒さに肌の緊るのを覺える。

『兄さん仕事をしてますか。』前の家を覗き込んだ。主人は小さな佛像を膝の上で刻んでゐた。

『社にお出かけ？。』朝から飲んだな、といつたやうな目付をした。女と兄妹の癖に氣質はまるで違つてると思つた。

『どこへ行くか自分にも判らないんです屠牛場でも見に行かうかと思つてるが。』

眞田は何の氣もなしにさう言つた。そして屠牛場で苦しい牛の唸きや、美しい血や濁つた血が流れてゐるのを見たら、自分の頭腦も心氣も少しは異つた感じに打たれるだらう、开したら今日ひと日は異つた氣持でゐられる――斯う思つた。けれども屠牛場はどの邊りにあるか、行つたら直ぐ見せてくれるか、开麼ことまでは考へてもゐず知つてもゐなかつた。

『屠牛場？變なところに行んですね』主人は、さも汚なさうに眉を顰めた。

お妻は火鉢に手を翳してつくねんとして德ちやんを待つてゐた。紅白粉が凋落すると言つたやうな、淋しい心地は絶えず彼女の胸に影の如くつき纏つてゐた。――『お前の手が好きだ、手だけは荒すな。』眞田は酒に酔ふと手を取つて、よく斯う言つたが『此手も恁麼に荒れてしまつた』――

―お妻は兩手で化粧する時クリームを塗るやうに、顏を撫で廻して、又手を眺めた――

徳ちやんは夫れから小半時もしてやつて來た。欠伸をしてゐたお妻は、俄にはしやぎ出した。

夕方には時雨さうな空合となつて來た、町の響は年の暮を思はするものみである。眞田は身の置きどころがないと言つたやうな顏をして、急ぎ足に歸つて來た。懷中には年暮の拂ひや何彼に要る金を工面して持つてゐた。

上り口には見慣ぬ下駄が脫であつた。眞田は一寸ためらつたが、思ひ切つて戸を開けた。女と客との間には三味線が横たへられて、端唄の本なども取亂してあつた。寫眞も二三枚交つてゐた中に、眞田のも見えた。

『お留守にお邪魔致しまして。』客は叮嚀に挨拶した。

『いや、始めまして、此方が萬世の？』女にワザとらしく聞いた。

『えゝ』女はにこ〳〵笑つて許りゐた。

それから女達は昔話などした。泣虫の△△さんが本町の呉服屋に据り込んでるの、××さんはまだ新富町にゐるが彼の人も却々足が洗へないの、そんな事を語りあつた。

『だつて此年になつて又出やうッて人もあるからね』。徳ちやんは可笑しさうに高く笑つたが其聲には艶がなかつた。『また私は出ようと思つて、今つうちやんと復習てたところなんですよ。』

『どこから出るんですか。』德ちやんは、言つてよいかしら？と云つたやうな目でお妻の樣子を窺ひ乍ら

『あのう、つうちやんのお家から。』

『さうですか、夫れはおめでたい。』

『なに、ちつともおめでたかァありませんよ。』

煙草をのんでゐたお妻は、座が白けないやうに口を挿んだ。

『あなた、年の市に伴れてッてね、今仕度するから。』德ちやんも一緒に行くらしかつた。眞田はさも忙しい用事が起つたやうに立ち上つて

『さうはして居られない。之から田舍に行くからお前も從てお出で。』命令するやうに言つた。客も女も突然なのにたゞ呆れてゐた。

六

俥は雨の中を駛つてゐる。しめやかに降る音は、目黑の森の近づいたことを思はせた。女は深く下した幌の内で目を瞑つてゐた。小さな心は絶ず顫へてゐる。

軈て不動前のお茶屋は叩き起された。時ならぬ不意の客は、尠からず女將から女中まで驚かした。新らしい木の香や壁の臭氣が、咽るやうに漂うてゐる新座敷は開けられた。膳の上には貧しい乍らも酒に肴も並んだ。

女は女中の前では、晴やかに話したり笑つたりするが、男と差向ひに

なれば默つて煙草ばかり吹かしてゐる。

男はいろ〳〵の話題を出した。女は唯『さうねえ』とばかり張合のない返事をした。

『この襖はあつたらものだね、こんな下手な繪で汚して了つて。』恁麼ことまで話を擴げたが、夫れは女の心を愈沈み込ませる許りであつた。

雨はしと〳〵降つてゐる。庭の松の枝から時々落つる雨垂の音で風が騷いできたのが知られた。ふたりは火鉢を圍んで離ればなれに思ひ耽つてゐた。

酒は冷たくなつた。男は苦い顏をして杯を置いた。女は默つて德利の尻を火鉢の火に翳し乍ら男の顏を見つめた——大きな目、長い瞼毛——

ぢつと見てゐる目には熱も光もない、たるんだ目、男の心を惹くに疲れ切つたやうな目——白い、肉の豐かな、襟許の美しい此頸(こうくび)は力を限りに抱きしめてやりたい程だが——あゝ目が、彼のたるんだ目が熱を冷す。白く光つた秋の水のやうな氣が、ふたりの間をスウと流れてヒイヤリと熱を冷す。——『お前は男に惚れるのに疲れたんだな、世間の男はもう飽きたかい』斯う言つてみたかつたが、男の心は言ひ知れぬ寂しい感情に摑まれて、口を利く事も出來なかつた。口を切つたら不覺の涙がほろほろこぼれさうに思へた。男は女に弱い涙を見する事を好まなかつた。——

雨はしくしくと暗い夜を愁歎(すうたん)いてゐる。——

明けると雨は歇んでゐた。遠くで鷄の聲がする。男は竹籔のつゞいて

ゐる目黒の村を思ふた。

『飯をくつたら散歩しようか。』朝から酒を飲んでゐた。

『あたし厭。』

『また始めた。不動様や比翼塚も知らないだらう。瀧もあるよ。』

『何があつてもいや。』

『ひどく御機嫌が悪いね、年の市に行かなかつた恨みかい。』

『さうぢやないの、あたし、目黒は嫌ひなのよ。不動様にあなたとお參詣をすると縁が切れるから。』

『また、かつぐのかっ。』男はおかしさうに言つたが女はまじめであつた。

『あたし、昨夜から變な氣がして、しようがないの、何處か知らない處へ伴れてつて頂戴。』

男は女が低い信仰に囚はれて、惱んでゐることを憐れまずにはゐられなかつた。

『縁が切れたつていゝぢやないか。』出るまでに恁麼ことも言つたが女は默つてゐた。

ぶら〳〵停車場までふたりは歩いた。行人坂に蒐る時、男は斯う言つた。

『お前が吃驚するやうな汚い田舍に伴れて行くが途中で駄々を捏ねては嫌だよ。』

『大丈夫、どこへでも行つてよ。』

『それから今夜はお前も話すんだぜ。何か言ひたい事が胸一ぱいあるだらう。』

『何でも話すわ。』

山の手の電車は年暮の忙しい人で溢れてゐた。男は他人が狂人のやうに焦つてゐる中を、暢氣に遊んでゐることが嬉しかつた。たゞ女が隅に小さくなつてゐるのを飽足らなく思つた。

やがてふたりは、中野で八王子行の汽車を待つた。男は前の茶屋で正宗の瓶詰を買込んで外套の隠袋に滿した。

ふたりが乘つた汽車には、田舍藝者らしいのが旦那と話してゐた。女は藝者の物腰の下卑てゐるのを心で嘲つてゐた。

境驛で下りた。立場には俥も馬車もない。『歩けてよ』女の勇んで顔をみて、男は安心したといふより面白さうに並んで歩き出した。

七

武藏野は、痛ましい姿に瘠せてゐた。すく〳〵と淋しう立つてゐる畑の桑は、秩父颪に鳴つて、夕日は森の枯枝に顫へてゐる。荒寥たる高原の末に白い富士が浮いて、風雲が吹き曝された白旗のやうに、あはたゞしう斜に流れた。

『まア富士が凄いやうだわね。』小金井の枯た堤を指れても、感じなかつた女は恰度乃を向けられて、怖へたやうな驚嘆の聲を惜まなかつた。

森の中の家からは、立ち迷ふ煙が浚はれるやうに風に消ゆる。どこともなく鶏を呼ぶ聲がする。乗合馬車の喇叭は、ちぎり取れるやうに切々に慄へて響く――男は瓶を出しては酒を呷り、开しては歩いた。年暮の買物をして歸る農夫は幾人も見馴れぬふたりを振返つて行つた。

男は、女とぶら〳〵知らぬ道を歩いてゐる事が嬉しかつた。今宵は旅の宿で女からしんみりした話を聞くといふ望みが、胸に湧いてゐるだけに　この旅が一入樂しく思はれた。そして自分と女とを色々の境遇に置いて思ひ耽るのが、尠からず涸々の情緒を潤した。歡樂が盡きて都落をする男女――編笠目深に旅から旅へ流れ歩く門付のふたり――夜逃して行衛さだめぬ旅の夕間暮――どれもどれもこの旅のおもひにふさはしい。

――小金井堤の一夜、物の怪の息に濡れたのか、櫻の雲はしつとりと重く垂罩めてゐた。目鬘や瓢箪や花見手拭が路傍に落て歡樂の名殘を語つてゐる。埃が鎭まつて淡い哀愁の氣が漂ふてゐる堤に、亂醉して川に溺れた人を探す松明を見たのも――掛小屋の茶店に打ち廻された幔幕の隙間から、給仕女が五六人しだらなく寢てゐたのを三五人して覗いたのも――あゝ今年の春の夜の、現ごゝろに見たなつかしい追懐である――

『どこまで行くの。』

男はは、つと夢の境から醒めた。熱を病んだ女の肌に不意に觸れたやうに、ぞつとして美しい夢から覺めた。

『家のあるところまで行くさ。』

『淋しい森ばかりだわね、あの森を抜けたら家があるかしら。』
『さうだネ、また野原かもしれない。』
『いゝわ、冬は蛇がゐないから。』
『夜になつても歩けるかい。』
『ゐゝ、まだ大丈夫。』
『寒いだらう。』
『ゐゝ。』
『飲まないか。』
『いや。』――女は男に寄添ふて心配さうに顔を見ながら歩いてゐた。
『ふじみはし』を渡つた。日は落ちて富士の尖頂には弱々しい光りがちつすらと殘つてゐた。甲州境の山々は黑くなつた。
漸う田無といふ小さな町に入つた。暗いなかにも白壁はくつきりと目に映つた。家々には洋燈(ランプ)が點つてゐるが、弱い光は道までは及ばない。ふたりは霜解のぬかり道をおづ〳〵歩いた。
宿屋らしい家は更になかつた。鉛の白粉をあくどく塗つた女のゐる小料理屋は見ゆるけれども、商人を泊めさうな宿とてもなかつた。
『泊てはくれませんか。』男は「おんやど」と書いた行燈の蔭から覗いて聞いた。膳に向つてゐた白い女は不審さうに男を見た。
『おつれさんは？』言葉には重い訛があつた。
『女がひとり。』――忽ち斷はられた。

『駄目だ、瞬昧屋ばかりたから。』男は又暗い道をとぼ〳〵と歩いた。女はおびえたやうに小さくなつてゐた。

大きな犬はのそ〳〵とふたりの後を嗅つてきた。色硝子を嵌めた湯屋は、耕作から歸つた男や女で賑つてゐる。

ふたりは漸くの思ひで宿についた。それは町外れの、天井の低いむさくろしい商人宿であつた。

八

女は赤い伊達卷のまゝ湯からあがつてきた。火鉢の前に据るや懷中鏡を取出して、紙白粉を手際よくつけた。

『まァお湯の汚いこと。蛞蝓がうよ〳〵這つてやしないかと思ふやうだわ。』濃い眉を濡手拭で撫でつけ乍ら言つた。低い天井はまだしも、足袋ざわりの荒い疊は緣すらもなく、隙間から油蟲が這ひ出しても古風な暗いランプの光では氣付さうにも思はれぬ。あたりの黑い壁はじめじめとして、遠くで雜木林が風に鳴る音も何となう濕つて重々しく聞える。

夕餉の膳は淋しいものであつた。棒鱈の煮つけ、賽の目に切つた豆腐の味噌汁、黃色くなつた漬物。ふたりは顏を見合せて箸を執つた。男が樂しみにしてゐた田舍らしい山の物や川の物は膳の上に見る事が出來なかつた。

瓶に殘つた酒を飲み乾して男は外に出た。暫くすると狼狽て歸つて來

た。横になつてうと〳〵としてゐた女は怖えたやうに飛び起きた。男の顔色は青ざめて廣い額はいさゝか汗ばんでゐる。

『お妻歸らう。迚もこんなところにぢつとしては居られない。俺が隱れて寢るところではなかつた。』――女の體も心も空洞になつてゐた。歸るも歸らないも开麼ことを判斷する程の氣力すらもない。

驚異の目を瞻つた宿の者を見向もせずに俥に乘つた。町を出ると木枯の音は物凄く野を吹き捲り林を騷がせてゐる。女は毛の襟卷に顔を包んでうと〳〵として車の響を聞いてゐた。

男の心は惡酒の酔に亂れてゐた。肉は酒の力で燒け爛れ、其炎は口腔や鼻腔から吹き出るが、皮膚ばかりは堅い結いあぶら藥で塗りこめられたやうに何の感覺もない――が、鼓膜のみは緊脹して風の聲も木立の悲鳴も轍の音も車夫の呼吸も明かに聽取れた。

鉛のやうに重い心は一刻毎に燻されたやうに暗くなつてくる――田舍で友人の家を訪ねると玆にも都の青年が來て年暮の苦しさを語つてゐる、宿の別室には掛取に來たらしい商人がゐる、恁麼草ぶかい田舍までも都會の騷がしい響が襲うてきたといふ事が悲しいよりも不快であつた、勘からず失望した。友人から聞く土地の話は總て想うてゐた事に反して、一層心を暗くし興味を殺ぐものゝみであつた。廢れんとしつゝある驛路の町は、なつかしいものではあるが、此古い色の中で騷がしい算盤珠の音がしたり、不快な色の印紙や印形が貼られたり捺されたりして恰度

死んだ沼の水に石灰や灰汁の汁をブチ込んだやうに搔き亂して了ふ――これが堪らなく嫌で、自分までが懷しい色の破壞者のやうな氣がしてくる――不快だと思ひ始むると、今夜女としみ〳〵語るといふ樂しみも何も彼も消されて、心は灰汁桶を搔き混ぜられたやうになつた――

ふたりは闇から明るみへ出た。女は四谷見附で甦つたやうに大きい息をついた。男の心はまだ沈み込んで、家に着くまでは目を瞑つて何物をも見まい聞くまいと力めてゐた。

『あゝやつぱり此座敷がいゝなァ。』男はどつかと坐つて今更のやうに狹い部屋を見廻した。女も「やれ〳〵」といつたやうな樣子をして火を起した。

漸く酒は暖められた。男は床をのべさせて其上にあぐらをかいて飲み出した。ふたりは何とはなしに輕くにつこり笑つた。ぬき衣紋にした女の頸は際立つて白く、疲れ切つてぐんなりした肩から體の線は柔らかく圓くて、着替へた華美な寢卷の模樣から御守札を包んで締めた赤い細帶まで、艶に又ふさはしいものであつた。

男は自分も寢卷に着替させて貰つた。世間の義理だとか道德だとか窮屈な一切から離れて、一夜を樂しく眠るといふことは人として生きる上に於て、最も大切な意義のあるものだと信じてゐるだけに、旅の宿の夜具だとか寢卷だとか敷布から枕までも夫々好みがあつた。燻んだ色の夜具、

皺くちやな寢卷、ぢゞむさい扱帶、そんなものに卷かれて眠る時には、色色な事が思ひ浮ばれて、顏も所も名も知らぬ旅の人がこれに卷かれて什麼夢に魘されたであらう。それを思ふと堪らなく不快だ――だから夜着から蒲團までけばけばしい色の柔らかな布で、袖口や裾は緋色で彩られ、總ての裏は目の覺むるやうな赤い色、寢卷はしなやかな布で襲てゐる浴衣は大きな麻の葉か蕗の模樣で色は快い藍、さもなくば踊や唄の師匠や俳優や藝者の手拭を綴合せたもの――男の好みは軈て女の手で仕立られた――その寢卷を着て其蒲團の上で男は酒を飲んでゐる――

九

男には、女の氣ごゝろが更にしれなかつた、をつとして何事にも感じのないうつけものゝやうに見える女が、時々男に向つて言ふ言葉から仕打が、殆ど疵のないほど爛熟したものとなつて、鋭い觀察力も冷やかな判斷力も却つてのろいものとなつて了ふ。男は其度毎に心の裡で解くべからざる女の魔力に感嘆するといふより溺惑してゐた。――斯う解釋してゐる――これは女が自分を戀しての眞心からぢやない、是まで永い間世間の男に觸れてゐるので、その習慣が洗練されて斯うも爛熟した力となるのだ。女の心は總てに感じないだけに、天から享けた力は皆此點に蒐つてゐる、だから人を惹つける力が強いのだ。――

然し此解釋も一時の心の安きを求めただけで、日を經るに伴れて迷ひ

迷つて女の心は愈々Xとなつた。それだけ男の心も熱して、此氣ごゝろの知れない女を征服してみたいといふ興味が湧然として胸に溢れた。

――と同時に心細い寂しい思ひが其湧き立つ血の中に漂ふてゐた。それは男の性癖として女の總てを知り盡し、女の心を征服して了つたら、此凋落しやうとする容色を憐れむの心が薄らぎはしまいか？。男はこの憐愍の情は詩であると樂んでゐるだけに、此詩情を沒し去る事を唯譯もなく恐れてゐたのである。

ふたりは、年暮の迫つたのを知らぬものゝやうに、或る寄席の木戸を潜つた。

――賑やかな囃子の音に簾が卷きあげられると、高座には銀杏返しに結つた女がふたり、頭を下げてゐた。客は一しきり喝采した。樂屋から口上が述べられる。ふたりは始めて高座の女の何者であるかを知つた――花井お梅――男は名を聞ただけで詩情が渦の如く胸に張るのを覺えた。女はたゞ言ひ知れぬ怖しい力に心を攫まれて了つた。――ふたりは別々の目で高座の女を見てゐる。

ひとりの女は三味線の調子を合せた。お梅は華やかな座蒲團を押やつて、名披露目に俳優がするやうな仰山な御辭儀をした。江戸時代の深川藝妓を思はするやうなすつきりした顔、よく切れた目、恰好のよい鼻、白粉も濃く頰紅まで若々しく粧られたが、潤ひのない肌や皺は包み隱さ

――すつと立つた姿のよさ、褄から裾には一面こぼれ梅の模様、丸帶も眩く光る、金無地の舞扇をさつと開いて舞ふは「京の四季」――すつきりした振事には昔の面影は殘つてゐるが、踏む足にも手の振にも寂しい影が動いて、賑やかな踊も唄も客の心には暗く鋭く響いた。

――何たる悲しい光景であらう。錆た掛聲、踊る「かつぽれ」の拙さ、男も女も正視するに堪へなかつた。――大川端の箱屋殺し――醉月奇聞花井お梅の芝居――淺草のしるこや目黒のかこひもの、夫れから寄席の藝人――簾が下ると客は口々に色々の感じを語合つてゐた。「まづいものですなァ」「よく〳〵困つたからでせうよ」「狂人のやうな目ですね」「もうお婆さんになつちやつた」終りの聲は聞く人の胸を抉つた。

女は頻りに歸りを急いだ。男は女の顏色で其心の裡を見透したやうな氣がした。家へ歸つて酒を飲み乍ら恁麽話をした。

『あの女なら大川端で人殺し位はやれるね、お前には出來さうもない藝當だが。』

『あたし、今夜つく〳〵自分の行末を考へてよ。』

『へェ、ひどく悟つたものだね。然しお前もうか〳〵しては居られない年だからね、藝者稼業も三十を越したら駄目だよ。』

『全くよ、だけど、あたしなんか、ドウにもしようがないもの、今更お嫁にも行けやしないし、あなたを便るといふ年ではなし……。』

『お前は今、をれと斯うしてゐるが、全體どうしようと思つてるんだ。』

『何にも考へてやしなくつてよ。私は明日の事が判らないもの、ふらッと氣が變れば今が今藝者になるやら、夫れとも田舍に引込んで湯治場で遊び乍ら稼ぐか、それは自分にも判らなくなつてよ。だけど何だか藝者は私の性分に向いてるやうだわね、むしやくしやした時なんか三味線を彈てると自然に氣が落ついてよ。』

『いつも言ふ事だが、ドウしてお前はをれに身が任せられないだらうね。』

『さうネ、何だかあなたと一緒にゐる事が心細くて、先々が一層氣になるの、あなたは始ッから私には若過ぎてよ。それに私はモウ惚れたのハレたのといふのも面倒臭くなつちやつた。』噛切るやうに言つた聲は慄へてゐた。

『これまでに惚れ飽きたんだらう。』

『全くよ。』

寂しくふたりは笑つた。

十

大晦日の夕方からは、ちら〳〵雪が降り出した。

眞田は朝から酒に浸つてゐる。彼は時計が嫌ひなので、近所のが時を打つのを聞ては、苦い顔をしてゐた。それでも夜になつて同じ雜誌社に勤めてゐる松原、つゞいて洋畫家の正木も來たので、時計の響も年の暮も忘れて了つた。

鍋には豆腐や肉や青い物がぐつ〳〵煮えてゐる。お妻は酒の燗をするに忙しさう、眞田が日頃愛してゐる色々の盃は親しい友と友との間に、絶え間なく献酬された。若い人々の話は何れも自づと熱のあるものばかりであつた。正木は突然眞田の手を取つた。

『おい、何とか言つてくれ。今夜は君の毒舌を聞きにきたんだ、何とか言つてくれ早く言つてくれ。僕は迚も、僕は東京にゐれない人なんだ。』殆ど狂的に堅く握りしめて眞田の手を打振つた。眞田の口許には冷やかな笑ひが漂ふた。

『君はなぜさう冷酷なんだらうね、僕も一寸でいゝ、君のやうになつてみたい。』

『ふン、なれるものか。まア武者修行を四五年もやつてからだ。東京にゐられなくなつたらどこへでも行け。そして女から散々に弄ばれて來い。』眞田はぐびぐび飲んで許りゐる。松原は詩集を繰つては會心の一節を小聲に誦んでゐた。

『僕は明日立たう、一月一日、さう定めやう。そして大阪に行くんだ、其方がいい、失意の父を慰めてやらう。迷はずにさう定めよう、ねェ君！。』

『どこへでも行け。君は人に相談するから迷ふのだ。然し一月一日など と時間の事は言つてくれるな。俺は厭ひだ。酒がまづくなつて了ふ。人間時間を氣にする程苦しいことはないよ。』

『善矣。ぢや時間の事は言ふまい。今夜は別れにウント飲まう。勝手にウ

ント泣かせてくれ。』正木の顔は醉が廻るにつれて青ざめてきた。

『奥さん暫くお別れします。永々お世話になりました。』お妻は差された猪口を受けながら

『まア、突然ですね。あなた――餘り亂暴な事を言つては不可ませんよ。正木さんは怒つて行くのぢやなくつて？。』

眞田の返事は只冷笑であつた。

『さうぢやないんです。眞田君の心はよッく僕に判つてゐます。僕はどうしても眞田君のやうに強くなれないから逃出すので、要するに弱い僕は東京といふ強い恐ろしい力にハザキ出されるのです。』正木の聲は慄へてゐた。

『私には何だか判りませんが、お名殘惜うムいます。でも、またお出でになるでせう？。』お妻の目には珍らしく感激の色が見えた。

『ゑゝ、櫻の咲く頃はくるつもりですが然し夫れもホンのつもりだけです。僕なんかどこへいつても駄目ですから。』

お妻は正木の家が沒落して、遂々斯うまで落ぶれた事を聞いてゐたので、目の前に若々しい正木が、目に涙を溢へてゐるのを見て痛ましう思つた。

夜更て正木と松原とは雜談に飽きたのか、蹌踉として出ていつた。お妻はあと片付をし乍ら正木の身の上を未だ思ふてゐた。

『あなた方の話は、全然判らなくつてよ。あなたが雜誌に書いたものが

判らないやうに。餘程むづかしい事なんだわね。』

『うむ、若いもの、話はお婆さんにはわからないよ。』

『またッ……ェ、お婆さんには判りませんとも。どうせお婆さんの天保錢ですからね。』

『天保錢だとも、お前のやうな馬鹿も尠いよ、その馬鹿とどうして俺は斯うしてるんだらう。俺も馬鹿かしら?。待てよ、少し俺も判らなくなつてきた。』眞田は深い思案に落ちた。——

『あなた、風邪をひきますよ。』お妻は男を搖り起したが身動きもせずに眠り込んでゐた。押入から花やかな夜着を出してそッと男に着せかけた。男の白い顏には酒の爲か汗ばんで脂肪も浮てゐる。女は鏡臺の抽斗から紙白粉を取出して、脂肪を拭きとつてやつた。薄く白粉は男の廣い額に殘つた。女は何とはなしに笑つて乱れた膳や箸などを片付けた。

夜は更けて四邊は森閑としてゐるが、時々戸を繰る音や、蕎麥屋の出前持らしい聲が聞ゆる。——お妻は火鉢の前に据つて始めて「大晦日だな」と思つた。それもたゞ思つたゞけで別に何の感傷も起らなかつた。

お屋敷の池の鶴が風に啼いた。咽喉を振り絞る鋭い聲を聞くと、お妻は耳の穴に針を吹込まれるやうな氣がした。

上野の時の鐘が鳴る。——

十一

お妻は上野の時の鐘には、時々心を動かされた。時計の音よりも鐘の響きの方が餘程氣持がいゝと思つて聞いてゐる。彼は鐘の音を聞いて身をつまされるとか涙を催すとか、妙に氣をそゝられるやうな事はないが、夜更の鐘は芝居じみてゐると思つて聞てゐる。――するうちに雪のちらちら降つてゐる舞臺が目の前に浮んで來た。美くしい梅幸の三千歳が見ゆる、直次郎に扮した羽左衛門のすつきりした姿が浮いてくる――鐘の純な細い響きは、すが〳〵しゝ夢ごゝちの耳に通つてくる――彼は若々しい昔の心に返つて、細い指で輕く長火鉢の縁を叩きながら、清元の一齣を口の裡で唄つてゐた。――

――冴え返る春の寒さに降る雨の――暮れていつしか雪となり――上野の鐘の音も凍る、細きながれの幾まがり――末は田川に入谷村――

「おゝさう〳〵此唄の入谷村といふは玆の入谷の事かしら。」男に聞てみやうかと思つたが、ただすや〳〵と寢てゐる――「やつぱり入谷はこゝだらう、上野の鐘の、といふ文句もあるから。」――お妻は自然と芝居の中に引込まるゝやうに心が浮々して來た。

トン〳〵〳〵門の戸を叩く音がした。お妻はッと芝居化された美しい夢の境から、汚い長屋と泥溝ばかりの現實の世界に蹴落されたやうに覺めた。――上野の鐘はいつか鳴りやんでゐた。

戸を開けると車夫が雪の中に立つてゐた。池の端の家から迎ひに來たといふ。お妻は座敷に引返してコートを着ながら什麼用事だらうと案じ

頻つた。然し德ちやんの相談の外は何もない筈だと僅に安心した。

隣の先生は未だ起きてゐた。眞田が起きたら？と賴んで待つてゐる俥に乘つた。雪は幌にさつ〳〵と音を立てゝ降りかゝる。

池の端の家では、まだ宵の口のやうに戸を開て電燈も煌く點つてゐた。

『おめでたう。』艶のある聲を浴びせられてお妻は驚いたやうに目を瞻つた。「姐さんモウ十二時を廻つたから元日よ。おめでたう！。」抱妓や雛妓は交々お妻に挨拶した。お妻は奥の間に通つた。床の間には正月の飾りがしてあつて、火鉢の前では親爺が酒を飲んでゐた。

『おめでたう。お父さん用事ッて何？。』

『何ッて、彼の女が來ないんだよ。』

『ゑッ、德ちやんが？まァ――。』お妻は德ちやんが夕方から來てゐることだと許り思つてゐた。德ちやんには金が百圓貸てある。元日から出られるやうに着物も用意してある。その口渡しをしたのはお妻だ。お妻の胸は嵐のやうに騷いだ。

母親は昨日德ちやんの連合の遊び人が來て、もう五十圓貸せと强請たことや、七草が過ぎたら幾らか貸さうと斷つたところが、一寸お德を金策にやるからと云つて伴れ歸つた――その儘歸つて來ない「始から騙る心算ぢやなかつたのかい。」とお妻に恨みを言つた。

この場合お妻は當惑するばかりで何の考へもなかつた。「たゞどうしたのだらう。」とばかり言つてゐた。親爺は詐欺の告訴をすると憤つてゐる。

お妻は兎に角證文も取てある事なり、もう二三日待つてくれ、德ちやんも私を踏付るやうな事はしまいとなだめた。

『もう彼の女は眞平だ。彼麼遊び人がついてゐちや、先になつてグズグズ强請込まれるに定つてる。』お妻が歸る時に親爺はキッパリ斯う言つた。

雪はもう歇んでゐた。上野の森は眞白くなつてゐる。俥の上で德ちんの仕打をつくづく恨めしう思つた。「元日早々厭な話を聞いて了つた。緣起でもない。」氣が焦々して之れが癖の癖が高くなるのを覺えた。

眞田は未だうたゝ寢してゐた。お妻が搖り起すと何か口の裡で言つてゐたが、又前後も知らず寢込んで了つた。酒の臭氣は室に滿ちてゐる、お妻は窓を細目に開けて寒い風を入れた。——「夜があけるまで起きてゐよう。寢たつて寢られやしない。」火鉢に炭をつぎ足して、自分も夜着を羽織つた。

火は熾んに起つた。双の頰が火照り、荒れた手もいさゝか脂肪が浮いた。白湯を呑まうとして不圖考へた。

おゝさう〳〵、三年の間茶斷してゐたがもう今朝で滿願になつた——あゝ嬉しい、と悅びの色は包み了せず、九谷燒の小さな湯呑で、新しい茶の香を心ゆくばかり味つた。

四邊はひそりとした。風が立つたのか門の注連飾がさら〳〵と鳴つてゐる。

十二

元日から眞田は客を迎へるのに忙しかつた。來る客も來る客も皆まじめな者はゐない。眞田は此隱れ家を秘してゐるだけに、來る者は心を許した友か、さもなくば此入谷で知合になつたもの許りである。

彼は晴々しい顏をして、毎日客と酒を飲んだ。然し「おめでたう」とか「あけまして」とか、改まつた年頭の祝辭を述べらるゝのを深く厭つた。彼の生活には一日とか一年とか、苦しい區劃を約束する事は全然不必要であつた。彼は夜が明けたとも年が暮たとも思ふ事を好まない。北極か南極のやうに半年でも一年でも際限なく晝であり夜でありたいと思つてゐる。彼は時間といふ不快なものゝ連續を好まない、たゞ悠久に自然のまゝでありたいと希つてゐる。だから彼は毎朝規則のやうに顏を洗ふことは敢てしない。これは苦しい約束に囚はれたものと思ひ、樂しい生活の興味を破る無益な事と信じてゐる。唯こゝろの向くまゝに必要な場合に應じて、顏を洗ひ口を嗽いだ。——此氣分で彼は正月といふものを迎へたのだ。客の祝辭は虛僞の聲に聞え、改つた儀容は口癖の「ちやんちやらをかしい」ものに見えた。然し平日と違つて毎日親しい友や知人が訪ねて來て、共に酒を飲み共に語る機會が多くなつたのを喜ばしく思つた。

お妻は正月に入つてしみ〴〵肩身の狹くなるのを感じた。緣起を尊ぶ

稼業の毎年お屠蘇を祝ふことに馴れてゐるので眞田の爲す事は皆不祥のやうに許り思へた。近所や前の兄さんの手前もあり、心は兎に角、體裁だけでも何とかしてくれてよさゝうなものと一度は怨んだ、――が、あの氣象の迚も聞入さうにもないので、心ばかり艶やかに丸髷にも結ひ、さつぱりした着物を着て、裏口から惠方に向つてお日樣を拜んだ。

眞田は或る骨董屋の手代から、富豪の嗜好の事を聞て斯う言つた。『その金持とやらは美術品を株券同樣に心得てるんですね、夫れは美術家を侮辱するといふものです。畫家が丹精凝らして描たものを此畫家が死んだら此畫は幾らに値が出るだらう。さうすると銀行に預金して置くより利得があるなんて、實に言語同斷な話です。さういふ奴に限つて盲目だから畫は分らない、イカモノ位は摑んでゐやうが、假令イカモノにせよ、無名の天才が描た美術品だ。金糞同樣に見られちや堪まつたものぢやない。こんな奴には足や口で曲書した繪をイヂらせるのも汚らはしいです。』

また酒好きのぼんくらと人に卑しまれてゐる或る蒔繪師には斯う言つた。『さう泣言を言ふな、君は僕から見ると實に羨ましい人だ。君はあつたら飲む、妻君はあつたら食ふ、子供もあつたら食ふ、金が殘らないなんて开麼不心得な事を言ふな、生活は實に簡單で愉快ぢやないか。僕を見ろ、インキのやうなものだ、毎日雜誌の紙を黑くして心にもない事をもつともらしく書かねばならぬ、氣の利かない事夥しいや。』――蒔繪

師は酒を飲んでは笑つてゐた。近頃時計の蓋の裏に美しい或る繪を細かく蒔繪をする、其技に妙を得た。「それはうまく書けますよ、描いてゐて又馬鹿に氣持がいゝですなァ。」――そんな話もした。

また或る先輩が眞田の生活を批難し、お妻の素性を卑しむやうな口吻を漏らした。眞田は腹の底から搾り出すやうな悲痛な調子で答へた。

『――僕はあなた方と生れた時代が違ひます。僕は若いんだ、そして世間の道德だとか義理だとか人情だとか、皆僕には自然に成たつたものゝやうに思へません。――僕の身うちの者は斯う言ひます、誰さんに負ないやうに出世しろ、そして自分達を安心させてくれ。――僕は實に迷惑千萬な要求だと思つてゐます。出世しろ！實に虛榮心に囚はれた虛僞の聲ではありませんか。僕は此聲を聞くと慄然とします。要するに意見があなたと違ふどころの騷ぎぢやない、生れる時は愚か、母の胎内にある時からモウあなた方とは、時代の血の色が違つてゐたのです。――御好意は感謝しますが、然し當分此儘放つて置いて戴きませう。僕は自然に反抗しようといふ勇氣はありませんから、若しあなたの仰言る事が自然さうあるべきものなら、私も考へてゐるうちに自然さうなるでせう。現今では僕が熱心に要求してゐる强い刺戟――此刺戟がなければ生きてゐるやうでない位ですから――此刺戟を今の生活で得やうとしつゝあるのです。彼の女も現今では僕の興味と欲求の中心ですから、あなたの仰言るやうには參りません、惡からず。』――

眞田は毎日恁麽强い何物にか觸れた談話を交す機會があるのを嬉しう思つた。すべて氣力が充實してゐるやうに思つた。

十三

松の内が過ぎて珍らしい客がきた。それは或る力士の弟子で、漸く序の口に附出されたので年始がてら番附を持つて來たのであつた。

『どうして此家が判つたの。』お妻は髮の伸びかゝつた小力士が、羞み乍ら眞田に返盃して居るのを、可愛くて堪らないといつたやうに見て居た。

『池の端のお家で伺ひました。』

『野郎、東京辯になつちまつたな、お國言葉で話をしろ。色氣づくと强くならないぞ。』

『いゝわねェ、東京の人になるんだもの、言葉がよくなれば弱くなると定つた譯ぢやなし……それともお前、いゝ女でも出來たのかい。』

お妻は珍らしくからかひかけた。

『そんな事が、おかみさん……。』肥つて頰が落さうな福々しい顏を紅くした。

『おや、小指もないのかい。まア甲斐性がないのねェ、でも、お師匠さんや、兄弟子なんかゞ、美くしい藝者衆や女にちやほやされてるのを見たらどうなの。羨ましくはなくつて。』

『そりや、おかみさん……。』
『羨ましいと思ふの。さうだらうよ。話せるわねェ、一寸あなた。』
『野郎いくつだい、十八？女が欲しい年だな、ではどうだ、此おかみを貰つてくれないか。』
『旦那、御冗談ばつかし……。』
『小嵐いゝだらう。あたしでもいゝだらう。おや、もぢ〳〵しずにさ、どう？いけないかい。……無理もないわネお婆さんだもの。あアあ、とう〳〵小嵐にも振られちやつた。』
小力士はお妻に手を取れて、小さくなつて慄へてゐた。女の滑かな柔かい手に始めて觸つたので、怖ろしい中にも經驗したことのない温かい快感を覺えた。それが打捨られるやうにぱいと離された刹那、何とも言へぬ寂し味に襲はれた。
『おかみさんを貰つて呉れなければ、一ッ白狀させるンだ。さア、お前の惚れた女は誰だい。俺が取持つてやる！。』
『惚れた女なんて、开麽ものはありやしません、たゞ……。』
『たゞどうしたんだ、たゞ女が欲しいと思ふだけかい。そんならどんな女でもいいのだらう。金を遣るから歸りに遊んで行け。』
『いゑ、遊びなんかいつたら親方に怒られます。十兩になるまでは女と口を利くことも出來ませんから……。』
『ふゝむ、すると何か、女が欲しいなァと思つたら、どうして我慢する

んだ。』

『小嵐どうするの、言つて御覽な。』

ふたりは笑ひ乍ら俯向いてもぢ〳〵してゐる小力士の顏色を窺つた。

『どうッて、そんな時は體に力を入れて紛らします。それでも不可ない時には眞裸體になつて、稽古場で四股を踏むか、柱にぶつかりますよ。』

『こいつァ妙案だ。貴樣は豪い、其イキで勉强しろ、立派な力士になれるぞ。どうだ、开麼ときには力が出るだらうね。』

『氣持はどうなの。』

小力士は疊の目を指先で數へて許りゐた。

『いつたつていゝぢやないの、羞かしいのかい。』

『どうッて、別に……たゞ腕を斯う張つてウーンと力を入れると肌が眞紅になつて體ぢうの筋がピクピク動くやうな氣がします。……力は出ますよ、本當の力が出ますね、エイエイッと拳で腕を叩きますと、血が寄つてあかァくなるのが面白いやうで……別に氣持ッて事は……。』

『一度見たいわね、お前の肌だから屹度美くしいだらうよ。』

『おい、こゝで一ッやつてみろ。おかみさんが彼麼に見たいと言つてゐるぢやないか。』

『今は旦那……。』

『女が欲しくないッていふの、現金だわね、いゝぢやないか、あたしでも。』—お妻も眞田も笑ひ崩れた。小力士は座に堪えられぬやうに赤くな

うてゐた。

『親方はまだ何かい。柳橋のお慶ちやんの處へ行くのかい？。』

『ゑゝ、それに彼の家の玉ちやんと△關が近頃深くなりまして。』

『まァ、さうかい、お前も深いなんて、粋な言葉を覺えたのね。』

小力士はお妻の顏を窃みみるやうにしては、色々の物を食つた。歸る時には鷹揚に何度も頭を下げて禮を述べた。

『もう歸るのかい。もちつとお遊びな、お前が、おかみさんと言つて呉れるので本當に氣持がいゝよ、近頃奥さんづくめで厶り奉られて、つくづく嫌になつちやつたの。』お妻は櫛で小力士の坊主頭を撫でつけてやつた。

十四

お妻の心は頻りに動いてきた。

眞田は酒を飲んでは雜誌社に出勤する。夜遅く歸つて來ては酒を飲む。——其日その日を氣の向くまゝに送つて居ればよい、と云つたやうな風がお妻には便りなく思はれた。そして自分も眞田がその當座だけしか愛してくれないやうな氣がして、どうしても眞田が言ふことに、心を傾けて聞く氣にはなれなかつた。

この頃は老けた、といふことをしみじみ思ふやうになつた。そして自分の白粉をつける壽命も僅か一二年に迫つてきたといふことを悟つた時に

は、惡い辻占が卦の表にあり〳〵と出たやうに心が顫へた。

眞田が留守になつて、ひつそりしてくると毎日身の振りつけ方を考へた。今からお嫁に行くといふ年でなし、一生親の家に厄介になるのも苦しいし、眞田のいふ儘にしてゐたら當座は暢氣であらうけれども、飽やすい彼の男のことだから振捨らるゝのは目に見ゆるやうだ。――寧そ藝者に出て、みつちり二三年も稼いで小商賣が出來る丈の資本でも作らへるか――夫れともよい對手でも見つかつたら――だが、いや〳〵此年で开麼ことはない、あつたにしろ日蔭者になるのは定つたこと、一生日蔭者で暮らすのはつくづく嫌だ――毎日同じことを繰返しては埒もなく迷つてゐる。

然しお妻は、男のゐない世帶を張つて、煙草でも小間物でも商つて、暢氣に暮したら嘸面白からうとよく思つた。が其ときには必ず、何だか男がゐなければ心細いやうな氣が影の如く添ふてゐた。――その心持を眞田に話すと彼はいつものやうに斯う云つた。

『お前は漸と人間のしなければならない苦勞に行當つたのだ、お前は浮た稼業をして世間から離れてゐたのが、年を取つて、自分の身の振方を考へねばならなくなつたから、眞面目に考へるやうになつたのだ、うんと考へて苦しむでみるがいゝ、さうするとお前の考へも定るだらう。』

お妻はいくら考へても始めの考へと同じでたゞどう〳〵めぐりをするに過ぎなかつた。开して氣が弱くなつたことが、自分ながら愛想が盡き

る、こんなに涙なんかこぼしたことはなかつたが――と不思議に思ふ位であつた。――どうして眞田と二年も斯うやつて縁が繋がつてゐるだらう、不思議といへばこれも不思議に思はれた。今まで半年と持越した男はなかつたが、今度はどうして恁麼だらう、自分の心に問ふても、別に戀しいといふやうな熱情はない、また斯うして居らねば食へないといふこともない、それどころか斯うして世帶を張つてゐると、却つて自分が金の廻りも苦しくなつてくる譯だ――どうも自分の心の底から其理由を見出し得なかつた。

たゞ眞田と離るゝといふ事に思ひ及ぶと何となう心細くなつて、荒海に臨んだ斷崖の上に立つてゐるやうな氣がする――たゞ夫れだけだ。すると心丈夫に思ふために取縋つてゐるのだらうか?。それにしては眞田は若い、全く若過ぎる、あの人が男盛りになると自分は老けて便りの綱も切れさうな氣がして、思つてもはら〳〵する。――

お妻は思つたゞけのことを皆眞田に話した。眞田は女の心が絶えず動搖してゐるのを冷やかに見て、心の底までを見透し、時々肺腑を抉るやうな皮肉やら、または女の血を湧立すやうな同情の言葉を浴びせて、女が慄へたり滿足したりするのを見るのが樂しかつた。

お妻は朝起きて化粧(おつくり)をしてゐると、隣の座敷で聞き馴ぬ子供の聲がする。先生の奥さんは口喧しう何彼と世話をしてゐた。これは豫て聞いてゐた長男で「今日は十六日の藪入だな。」と思つた。

奥さんは臺所で御飯の仕度にかゝつてゐるやうであつた。子供は足音荒くやつて來て

『お母さん、今日は白い御飯でなきゃ嫌だよ。』と言つた。奥さんは子供の耳に口を寄せて何か言つて聞かせたやうだつた。それから子供はお妻に氣兼するやうにして座敷に歸つた。

お妻は火鉢の前でまた考へ込んでゐた。隣りの先生は年が五十、奥さんは三十幾つ、子供が五人、苦しい暮向をみるといろ〳〵の事が思ひ浮ばれた。――暫くすると隣の座敷で精進揚を作へ始むる音がした。ぐら〳〵油の沸る音は騷々しい程聞えた。お妻は額を手で支へて沈み込んでゐると、忽ち油の臭氣が漏れて來て、咽るやうな煙はもや〳〵と襲つてきた――。

くさ〳〵してゐる心は眩めいてきて、臭い煙が目から鼻に沁みて涙がぽろ〳〵こぼれさうになつた。

眞田は滿團を被つて此樣子をみてゐたが、何となう「悲哀な滑稽」といふ言葉を思ひ出した。

隣では芋を切る音がする。

十五

隣座敷の騷ぎも鎭まり、立ち迷ふ煙も漸と消えた頃、眞田は起き上つて湯にいつた。

春とは云へ、名ばかりの注連飾はしてあるが、どの家も營養の足りない

青い顔ばかりみえて、四邊の空氣には黴が漂ふてゐるやうに思はれた。泥溝を覗いて鼠を捕つてゐる爺さんもあつた。破れた山高帽を被つて、古道具を下げて行く貧相な朝鮮髯や、病みほうけた老婆を口汚く罵つてゐる齒の黒い女房などが、僅かの歩みの間に見られた。

浴槽の中には骨格の逞しい男ばかり浴つてゐた。眞田はけば〳〵しい寢卷や浴衣を脱ぐのが、あたりの色と餘り懸隔れて目立つやうに思つた。开して華奢な少しも勞働をした事のない細い弱い體を、男らしく肉瘤の張切てゐる體ばかりの中に入るゝことが、何だか強い力の壓迫を受けるやうで、肌に觸るゝ湯までが、ピリ〳〵と毛穴から刺さるゝやうに感じられる。

眞田は隅の方に身を寄せてゐた。前には刺青（いれずみ）の色が湯の熱と手拭の摩擦とで、際立つて鮮かになつて、これが肉の動くに伴れて紋々の波を打つ、殆ど技巧の限りを盡して彩どられた勇み肌の男がある。これを中心として力の滿ち充た肉團が濛々と罩めた湯氣の中に浮んで、硬い皮膚に音を立てゝ磨つたり、肺の廣さと強さを思はするやうな荒い呼吸をしたり、水を被つたりして、互ひに生氣を競ひ、強い張のある肉聲が漲つてゐるのを感じた時には、赤い血の激動するのを覺えた。

湯屋を出ると寒い風は襟首にぞつと沁（しみ）た。凍（ゐ）てたぬかるみの邊に、ひとりの若い女が大勢の子供に取卷かれてゐる。髪は亂れ視線はいつもあらぬ方に迷ひ、唇の色は失せて荒れたところには血が滲んでゐる。この

痛ましい唇から顫へながら鋭く細い聲が漏れる。彼の女は唄をうたふつもりであらう、節も抑揚もないが聲は何等の邪氣も混つてゐない、といふものゝ悲しや聲帶はふるへて、かれ〴〵に聞える。——

眞田の心は恐怖に摑まれ心の目は涙で潰れた。彼は路傍に狂人をみかけた刹那は喪心したものゝやうになつて、全身の血の色は俄に激變して凄じい勢ひを以て逆流し、その黑い血は血管を吹き破つて、腦漿を啄き亂すやうに感ずる、开して自分の血液の中には精神病の血が流れてゐることに思ひ及ぶと、彼は目の色が變り唇から皮膚の色までが一種不快な色になるのが、あり〳〵と判るやうに神經が鋭くなる、これが彼の癖で——瞬間ではあつたが見まい〳〵と力めてゐる狂女を見て了つた。——

『酒だ、早く。』眞田は呼吸するのも恐れるやうに沈み込んだ。恁麼時には、どうしてよいものか、いつもお妻は迷つた。お座敷で空世辭の調子を合せることは容易(たやす)かつたが、眞田の心を見透して、うまく機嫌をとることは、をつ、、、とりした彼には出來なかつた、で、たゞをどをどして言ふ儘になつてゐる。

唇を燒くやうな熱い酒は五臟に浸みた。體ぢゆうに潛んでゐた酒精は、熱い酒の炎で目が覺めたやうに共鳴りして血管を潮の如く流れ始めた。涙で濡た心の目もどうやら醉つて來た樣な。——が、胸の鏡には絶えず色々の恐ろしい繪が映されてゐた。まざ〳〵と現れる座敷牢、相貌の凄い叔父の目、唸き聲、狂はしい唄、怒號、嘲罵、暴力、號泣、そして狂

死。——

彼は麥酒瓶を手に持つた刹那、これを石に擲付けたら氣持がいゝだらうと思ふ。秘藏の短刀をみれば全身の細胞がくわつと赤くなる。會食してゐると突然卓子を蹴倒して、人の驚く顏がみたくなる。が、恁麼ときには彼は力めて冷やかな心を呼覺して、自分の熱した心を監視させることを忘れなかつた。

こんな時には、酒の力を借て亂醉するの外はない、が亂醉も殆ど何物をも意識せぬまでに醉ふのが例である。彼は盛んにコップで呷つてゐるうちに、今まで恐怖に痙攣してゐた心も自然と酒精に魔醉して了ふのを覺えた。そして頭のうちでは心が此まゝ酒で爛れてぐたぐたになればよい、其創痍が腐敗して肉體までも腐蝕して了へばよい、斯ういふことを思つた。が、又頭の一角では猛然として「さうでなくば刺戟だッ。精神も肉體も驚嘆してすくむで了ふやうな刺戟だッ。」斯ういふ或ものがあつた。——彼の頭腦は混亂してきた。どんよりした目の前には、目の大きな髮の黑い白い顏が浮いてゐる。

『お妻ッ。世界に俺ほど惚れてゐる男が外にあるかい、お妻ッ。』

白い顏の肉は動いた、ぼんやりしてゐるが笑つたやうだ、大きい二個の目は濃厚な媚をたゝへてゐるだらう。光つてゐる。——

十六

『どうだ、返事をしないか、俺のやうに惚れてゐる男はないだらう。』
赤い唇が動いた。
『それはないわ。』――聞馴れた聲だ。まだ艶の失せてゐないまるみのある聲だ。
『なければ惚れましと言へ。』――靄はいよいよ深くなつてくる。
『なんでそんなことをいふの？。』――靄のなかゝら理智の聲が聞ゆる。
覺めた聲が聞ゆる。
『何でもいゝ惚れましたと言へ。』
靄はいよ〳〵濃く深くなつてくる。酒の芳烈な香ひは靄の中に漂うてゐる。

『……。』
遠くでちやるめらを吹く聲がする、高く低く――細くながく――ふるへるやうな、そゝるやうな――綿々として聞ゆる。消えやうとしてはまたつゞく。――
『お妻ッ。なぜさうそつけないのだ。』
絶えず笑つてゐるやうだ。黒い髪からくつきりと白い顔が浮き出る。
『どうしたッ。何とか言へ！。』
口が大きく開いた。溫かい息がふゥと出た。――お妻は欠伸をしてゐる。
『お妻ッ、どうしてお前は命も何も入らないと云つて呉れないだらう、

お妻！。』

『さうねェ、私にも分らないわ。』――ああ覺めた聲だ、亂れてゐない聲だ。

――鶴は次第に淡く赤味を帶びてきた、心臟の鼓動がどッくゝと聞ゆる。

『お妻ッ、お前は迚も俺と心中する氣にはなれないだらうね。』

『死ならうなんて、考へた事もないわ。』――濁らぬ聲だ。目が光つてゐる。

『一生男に惚れずに暮すのか、寂しうは思はないか。』――

『それは何だか物足らなくッてよ。――今まで命がけで惚れたこともなし――これからありさうにもない――やつぱり斯うしてるのだわね。』

――心からか哀れに聞ゆる。酒のしたる音。――

『なぜ惚れない。俺に惚れてみろ。』

『……。』

『サ、俺の手を握つて、心からさう言へ。』――白い顔がチラ〳〵する。

鶴の中で柔かい手を探し出した。

『さァ言へ。』

『……。』

『早くッ……どうしてお前の手は冷いのだらう。しつかり握つて言はないか、しつかり！。』

『……。』

『何故ふるへるのだ。早く。』

――靄の中で細い艶の失た聲。――

『どうしても眞劍になれないの！。』

――忽ち世界は暗く濁つてきた。電がはためく、目がくらめく、耳が鳴る。

『お妻ッ、お前とモウ別れる時が來たらしいねェ。』

――白い顔はやつぱり浮てゐる。

『別れるのは可厭、たゞふたりで斯うやつてるの、今別れたら私は……。』

『あたしがどうなんだ。』

『心細い。』

『心細ければ、何故俺にすがらない！。』

『なんだか、あなたと私は手を握らうにも手が屆かないやうな氣がするの。』

『お前もさう思ふか。』

『あなた、どうしてなんでせう。』

『……。』

『あたし、自分で口惜くつてよ。どうしてあなたに縋れないのかしら。』

『縋りたいとは思ふのか。』

『ゑゝ。』

『では手をウンと伸ばすんだ。』
『だつて何だか、溝の向うにあなたがゐるやうな氣がして……。』
『うむ、溝があるんだなァ。』
『……。』
『ぢやァ、溝を飛び越せ。』
『とても、私は親や兄弟から離れても！といふ氣にはなれないの、すぐ考へ直して了う性だから。』
『ぢやァ、詮方がない、溝のふちをふたりで歩いて居るんだ。そのうちに橋があるだらう。』
『……。』

——靄はいよ〳〵深くなつた。酔は愈廻つた。お妻の白い顔もだん〳〵薄くなつてきた。手を探つて握つてゐる間に、手の感覺もぼんやりとして、眠くなつてきた。それでもお妻の言葉が耳についてゐる。——
——手をとられてお妻は考へてゐた。今日は不思議に眞田と謎のやうな、芝居の臺辭のやうな言葉を交したが、自分にもよく呑み込めた——まァゆつくり溝のふちを歩いて行かう——斯う心のうちで繰返した。

十七

お妻は膝の上に眠り込んだ眞田の頭を、そつと下ろして、枕を靜かにかつた。

年暮から掛つた、漸く縫上つた掻巻を着せかけた。柄も模様も眞田が好きさうな派手なもので、綿の工合も自分ながらよく出來た、目が覺めて此を見たらどう言ふだらう。お妻は仕立上つた着物を男に着せて、下から見あげた時のやうな氣持で、裾を押へてみたり、糸屑を拾つたりしてゐた。

それから机の上を片付にかゝつた。原稿紙や書籍や手紙など雜然としてゐる。その中に女の筆蹟の手紙を見出した。これは眞田が昔關係してゐた女から來た手紙で、眞田が關係して別るゝまでの事や、女と四五年振銀座で逢つてから頻りに手紙が來ることなど豫て男から聞いてゐた。また文意のあらましも聞かせて貰つたが、今手紙に障つてみると何だか秘密なことが記しあつて、其ところだけ眞田が飛ばして讀んだやうな氣がする、で、披いて漢字の分らないところだけ飛ばして讀んだが格別それらしいこともなかつた――お妻は手紙を捲きながら「これが悠氣といふものではないかしら。」と思つた。今まで朋輩やお客の事で悠ましいことは度々あつたが、眞田と一緒になつてからのやうに、何事につけ先廻りして推量するやうなことはなかつた。开して其度毎に自分の氣を鎮めて安心するまでには、心を勞することが體を働かすよりも甚だしく、ふつふつ恁麽こと考へるものでない、と思ふが「また今日も开麽氣がしてしようがない。」

お妻は鏡臺に向つて髪を結はじめた。束髪はうまく結へたが、鬢の毛

がどうしてもうまく掻けない、いろ〳〵の櫛を操て掻いたり、左手で輕く押へたりした。――「若いんだもの、彼の人も自分のやうなお婆さんに係合つて了うのも氣の毒だ、精々勝手な眞似をさせてやろ。そして自分もつまらないことで氣を揉むやうなことはしまい、損だ。」――斯うあきらめをつけたが、命までと打込んで惚れた人でないのに、どうして恁麼不思議な心が萠すのだらうと思つた。次第に深くなつて心が彼の人ひとりに腐れついて了うのかしら、と恐れもした。――

漸う氣に入つた髪になつてお化粧にかゝつた。クリームを塗つたり襟を濃くし直したり、刷毛で輕く叩いたりする間に、氣分もだんだん落ついて來て、白粉の快い匂ひにうつとりとなつた。お妻は白粉をつけた時ほど清々した氣持になることはない、五十になつても六十になつても腰が曲つても、白粉の氣は斷すまいと言ふと、よく眞田に笑はれたが何といつてもいゝものだ。

堀の小萬さんも老けて白粉を使つたがあんなに綺麗だつた――が自分は恁麼に白粉やけがして來た、それに白粉が肌にしみ込んだのか、いやな工合になつて了つた。額の生際を桐墨でつくりながら、また心細い氣がさした。

ぬき衣紋だからと云つて、模樣を低く刺繍せた半襟の襦袢を、ふはりと着流して姿見に映してみた。四海波の友禪縮緬、半襟とのうつりもわでやかだつた。胸のあたりを擦つて、乳が細くなつて、體の格好もよく

なつたと思つた。ふと或る男との間に生きて、すぐ死んだ女の子の事を思ひ出したが、それも着物を着たり羽織の紐を結んでゐるうちに忘れて了つた。

眞田はよく寢てゐる。時々眉を寄せて苦しさうな顏をするが、又すやすやと寢て了う。お妻は一寸池の端の家にいつて樣子をみて來やう、德ちやんの便りが判るかも知れない、夕方までには歸れるだらうと思つて、出がけにモウ一度鏡に姿を映した。

隣座敷では、子供が公園にでも活動寫眞をみにいつたのか、先生がひとりヴワヰオリンをいぢつてゐた。

『お出掛ですか、旦那にはさう申します、いつてらつしい。』先生は如才なく何事も呑み込んだやうに會釋した。先生は自分で裁縫したのであらう、褄の合ぬ布子を着てゐた。お妻は奥さんが「若い時から子供ばかり生んでゐてお針の稽古も出來ませんでした。」と臆面もなく話した言葉を思ひ出した。

上り口で雪駄を出してゐると、門の戸が開いて、人の影がチラとさした。『おやまァ。』——德ちやんが風呂敷包を持て立てゐた。

十八

眞田はお妻の花やかな聲が聞え、客の入つて來た氣配に、ふと眠りから覺めた。そして、ねたまゝ絹座蒲團と着物の擦れ合ふ快い音を聞てゐ

た。

『まァ、つうちやん、怒つたらうね、合はせる顔もないわ。』――客は徳ちやんだと思ふと、眞田はどうしても眠つた振をしてゐなければならなかつた。徳ちやんが池の端の家から、百圓借たまゝ行衛を晦ましたことは、お妻からもう聞いてゐた。いま自分が起きては何の用事で來たか知れないが、徳ちやんがテレるに極つてゐる、また斯うして秘密な話を聞いてゐるのも興味のあるものだと、其儘身動きもしなかつた。

『旦那はおよつてゝ？。』徳ちやんは氣になるやうだつた。

『えゝ、ぐでぐに醉つちやつて。……徳ちやん、どうしたの？、お父さんは怒るし本當に弱つちやつたわ、今もあつちの家に行くところだつたの。お前さんも少しはわたしの事を考へてお呉んな。』

『どうも濟みません。本當に何とも！。……あんまり踏付にしたやうだが、私も借ただけは持つて來たいと思つてね。』

『全體どうしたつてェの？。』

徳ちやんは聲の調子を低くした。眞田は聞漏すまいと耳を澄す。藥罐の沸る音が聞ゆる。

『實はね、良人のが、借たゞけ其晩すつかりになつちやつたといふのさ。私も呆れたね、あれだけ手切といふことを承知し乍ら其晩もう打つちやつたんだもの、だつてしようがないから私はお前さんの家へ歸らうッていふと承知しないの、どうしても今夜金を作らへてくれ、百兩はまだ死

んだといふ譯ではないからッて。それから私は田舍の親爺のところに泣付にやられたのさ……が駄目、毎度の事だからね、ぐづ〳〵する間に松の内も濟むだらう、お前さんの家でも正月當込で私に貸したのは知つてるし、どんなに心配したか……。』

『お前さんもそれは心配したらうさ。私も隨分……。』

『それは察してよ。本當にお氣の毒だつたわね。』

眞田はお妻のいふことが、いつも急所を外れて、老功な德ちやんにまろめこまれてゐるのが口惜い。が、呼吸も緩急なく平調にして居らねばならなかつた。

『でね、お父さんも怒つてるだらうし、又私も面目なくつて出られもしないから、お金を作らへたの、だけど今日は半金しか出來なくつてよ。あとはどうにかして是非四五日うちに工面するからね。つうちやん、お父さんのところをうまく取なして頂戴な。』

『さうねェ……。』お妻は返事を濁してゐる。——德ちやんが半金でも作へて來たのが既に不思議な位で、此上とても金の出來やう道理はないが、今こゝで請合つて父の手前が纏(つくろ)へるかどうか、お妻が迷ふ筈だと眞田は思つた。

『まァいくわ、兎に角お父さんに話してみるから、お前さんも今夜私と一緒に行つてお呉んな、いゝわよ、あたしがいゝやうに話すから行つておくれよ。さうでないと却つて都合が惡いから。』——お妻の言葉には德

ちやんも從はぬ譯には行かなかつた。眞田はお妻の肩に責任がかゝつてゐるだけに、此命令的な言葉には自然權威が備はつて流石老功な德ちやんも服從して了つたなと痛快に思つた。

ふたりは茶を入れて色々の話を始めた。お妻は茶斷が滿願になつたことを話して、うまさうにのんでゐた。眞田は咽喉が燒けるやうに渴を覺えた、いつもなら寢てゐるとお妻が口移しに水を呑せて呉れるが今日はそれどころか！。然し此苦痛を堪へて女の話を聞てゐることが又一種の興を催うす。

『德ちやん、お前さん、まだ頸(くび)に疵の痕がついてるね。』

『もう迚も治らないのよ。』

『お前さん、其疵を鏡でみる時に、先の御亭主の事を思ひ出しやしなくつて？。』

『それや思ひ出してよ。心中しかけた程の仲だもの、子までであるぢやないの。』

『さうね、子供もあつたね。その御亭主は今でもお前さんの事を思つてるかしら。……其人もやつぱし疵があつて？。』

『今はどうだか？。だけどお前さんだつて、子供を作らへた人のことは思ひ出すに違ひないよ。』

『それは思ひ出してよ。だけど、あたしはお前さんほど熱くはなかつたからね。』

眞田の鼓膜は張切るゝ程緊脹して、塵の落つる音も聞取れさうになつた、彼は探偵が隣室の話を聞かうと壁に耳を寄てゐる樣な氣持でゐる。

十九

ふたりの女は、金錢の貸借のことなどは忘れたものゝやうに、互ひに心置なく若い時の心持を語り合つて居る。

眞田は眠た振をして此話を聞いてゐると、ぞく〳〵するやうな快感を覺えた。彼は幼い時から探偵小說を好んで讀んだ爲めか、人の氣付ないうちに目覺しい仕事をして人が驚嘆するのを見て喜んだ。また人の秘密を手際よく探つて、その總てが闡明した時には、ひとり心の裡で微笑むだ。また小手先の敏捷な手品が好きだつた。すばやく人の目の先を瞞かして、人が不審に思ふのを嘲笑して誇りを覺ゆる。人の顏にそつと墨や白粉をつけたり、人の物を一寸側に隱して狼狽するのをみて尠からぬ滿足と快感を得た。——眞田はふたりの話を聞いてゐるうちに、忍術を以て自分の姿を隱して、ふたりの女の間に坐つて話を聞いてゐたら、定めし痛快であらうと思つた。彼は狸寢入して、泥醉の體を裝うてうまくふたりの目をくらまして居るといふことは、恰も掏摸が懷中物をかすめて隣の人が氣付かないと言つたやうな時の快味を感ずるのと、同樣ではあるまいかと引くらべてみた。

『德ちやん、今日も此人がね、あたしにお前は迚も心中は出來まいと言

つたが、あたしはどうしても心中するやうな氣にはなれないね。いつたい心中する時はどんな氣なの？。』

『どんな氣ッて、今から考へれば馬鹿馬鹿しい話さ。私が十七の年だもの、ただ先方の親が藝妓を女房にすることは出來ないッていふから、心中しようッて氣になつたのさ。』

『だつて咽喉を突いた時はどうなの。』

『その時はもうぼんやりしてたね。私は及物が厭ひだらう、男が短刀を出した時にはモウ氣がくら〳〵したね。これがモット年を取つてゐたら氣もしつかりしてやうが何しろね、んねェだつたからね。心中するといふ事が馬鹿にイキに聞えて又未來ではいつしよになれるものだと思ひ込んでたから可笑しいぢやないか。』

『ぢやァ、びく〳〵して突損つたんだわね。でも男も力が足りなかつたの。』

『何が何だか夢中さ、女中に飛込まれた時にハッとして、着物が血に染つてるのが見えたくらゐだつたよ。……然し私なんか、彼の時死んぢまつた方が氣樂でよかつた。』投やるやうに言切つた。

『あたしやどうしても死ぬ氣になれない、またさういふ折がなかつたのか知れないが、死ぬッて事が何だかつまらなくつてしやうがないの、死にたいなんていふ人をみると狂人にみえるね。』

『おや、大變な鼻息だわね。だつて眞田さんとなら死んでも！といふお

安くない關係のやうだわね。若い人と一緒にゐるとお氣もじ樣だらう。』

『冗談でせう、眞田さんなんか、あたしが若し心中するにしては、敵手として食ひ足りないね。何しろ若いもの。』

『若いたッて、一寸みたところぢや、なか〳〵氣は老けてるやうぢやないの。』

『さうよ、氣はなか〳〵しつかりしてるよ。だけど、やつぱし年は爭へないね、どうかした時には子供々してるよ。』

『これは御馳走さま、その子供々したところが可愛いッてんでせう。』

『お前さん、さうひやかしちや嫌だよ、あたし、これでも毎日先のことを考へてるのよ。』

『それは初耳だね、私はお前さんこそ暢氣でいゝと思つてたの、だつて、眞田さんと一緒になつてたら氣苦勞もなさゝうぢやないか、お前さんも餘りうか〳〵しては不可ないよ。』

『あたし、全くうか〳〵してるよ、だけれど、眞田さんもそりや便りなくつてよ。これでも色んな女にあたつてみたいんだからね。』

『そりや若いもの、當分は我慢するさ。』

眞田は自分の噂が話題になつたのを聞いてゐた。その間に一番ふたりを驚かしてやらうといふ興味が湧たので、そつと夜着の袖から手を出してお妻の袂を探つた。袂の中には櫻紙や反古などがあつた。反古の半紙らしいのを引出して夜具の中へ忍ばせた。みるとお妻が毎日丹念に手習ひ

をしてゐた反古である。「早速」とか「その後は」などゝ薄い墨で書いた筆つきのやはらかい字が讀まれた。

眞田は此反古を音のせぬ樣に懷中で割き始めた。そしていくつも〳〵長くつゞけて端の方を撚つて結べるやうにした。

二十

『つうちやん、お前さん、どうして木場の旦那の方は止しちやつたの。大變都合がいゝッて事だつたが。』

『木場もよかつたが、旦那がおかみさんに惚れてるから見切をつけたのさ。色々入組んだ事情もあつてよ。……夫は先のおかみさんッてのが氣に入りでね。あたしは其人に似てるから落籍されたのさ。それに後のおかみさんが不可ない人だからね、あたしも意地になつて頑張つてたが、後で先のおかみさんと又一緒になることになつたから、今度はあたしの方から身を引いて歸つて來たのよ。あたしの性分で人のいゝ人だと直氣が弱くなるの、だけど後のおかみさんが彼の儘だつたら未だゐたね。』

『どうして旦那はお氣に入りのおかみさんと別れてたの。』

『何でも姑と惡かつたんだつて。……それに面白い話があつてよ。あたしが旦那に銘仙を一匹買つて貰つたと思ひな、一反はあたしのにして一反は簞笥に收つて置いのたのよ。すると電車の中であたしと並んでる女が同じ柄の銘仙を着てる、ハテナ、こんな類の尠い柄を着てるがと思つ

て顔を見ると、吃驚したぢやないか、寫眞で見覺えのある先のおかみさんさ、其時あたしは考へたね、この銘仙は旦那がやつたのに違ひない、あゝ旦那は先のおかみさんを之れ程可愛がつてるのに、自分は斯うしてるのは罪をつくるばつかしと……。』

『ひどく考へたものだね。』

『それから舅があたしの事をぐづ〳〵いふのさ。だから私は思ひ切つて舅に斯う言つてやつたのよ。旦那は今のおかみさんが氣に入らないからあたしを圍つてるんですから、先のおかみさんを呼び戻しておあげなさい。开したらあたしも安心して歸りますからッて。』

『それは豪い、よく言へたね。』

『あたしも考へたのさ。罪だと思てね。漸く後のおかみさんに金をやつて離緣する、先のおかみさんが歸つてくる、旦那は引とめるけれども、あたしはフィと歸つて了つたきり今に顔を出さないの。此時に考へたのよ。おかみさんのある人に世話になるものぢやない。つく〳〵さう思つてよ。』

眞田は夜着の中で、すつかり紙で御幣のやうな物を作へあげた。ふたりが興に乘つて話してゐる間に、德ちやんの着物のどこへ結びつけやうかと機會を待つてゐた。德ちやんは足がしびれたか膝を崩して左足を横に出した。足袋の底は擦り切れたとみえて、糸でかゞつてあつた。

『へえ、それは心配だつたね。それから直ぐ眞田さんと知合になつた

の？。』

『いゝえ、それから家で遊んでたが、居づらいしするから、新橋から出たのさ。その時に眞田さんと知つたのよ。』

徳ちやんはむづ〳〵する。が、眞田は巧みに、紙捻の端を足袋のコハゼのところに結びつけて了つた。彼は徳ちやんが立つて歩き出すときを想像して、心のうちで頻りに笑つてゐた。

『それからどうしたの、たゞに負けてをくから、お惚氣遊ばせ。』

『もう、やめ！。』――『あァあ、どうなることか、つまらないわ。』お妻は欠伸をした。

『もう暮かゝつたから行かうよ。夕飯の仕度でもして？。』徳ちやんは煙草入をしまひかけた。

『さうね、まだ寢てるよ。これで起きたら又お酒を飲むことだらうよ。いやになつちまう。……兎に角行かうよ。夕飯は前の兄さんの處に頼んどくからいゝわ。』

ふたりは立ち上つた。眞田は目をうすく開いてみて居ると、徳ちんは平氣で長い紙片を引ずつてゐる。

『早く行かうよ。』ふたりは、あたふたと雪駄を穿かけて出ていつた。眞田は起き上つて「ハテ氣付かぬかしら。」と思つてゐると外で「まァお前さん！。」といふお妻の聲が聞えた。眞田はお妻が發見した刹那の光景を想像して吹き出した。

――お妻の袂の紙片――それが割いてあつて――徳ちやんの足袋に結びつけてある――即ち覺めてゐたと知らずに――何も彼もしやべつた――眞田はみんな聞いて了つた――一片の紙は秘密が爆露してゐる事を説明するに充分である。彼等ふたりは、どんなにか驚嘆したであらうと心中快哉を叫んだ。

先づ冷めた茶に咽喉を潤し、それから便所にいつて、火鉢に炭をついだ。「これから酒をのまう。」斯う心で定めた。包み切れぬ嬉しさは思はず微笑に現はれる。

二十一

お妻は徳ちやんとは夕暮を道々話し乍ら歩いた。ふたりとも眞田に聞かれて了ひはしなかつたかしら、といふ恐怖が胸にあつた。

『あたしはいゝわ、みんな彼の人に話してたことなんだもの。』

『お前さんはさうだらうけど、私はきまりが悪いぢやないか。』

ふたりは上野の山下まで來た。お妻は時々眞田にすつぽかされて、油斷も隙もあつたものぢやない、彼の人は寢てゐても氣が張切つてゐて、剃刀のやうな人だといつたやうな意味を話して聞せた。徳ちやんは、おつとりしてゐるお妻と眞田との取合せが餘程變つて面白いと思つて聞て居た。

池の端では格子戸も磨きあげられて、敷石の上には浪の花が盛つあて

つた。姿見の前には美しい着物が取亂されて、抱妓のひとりは箱屋に帶を締めて貰つてゐた。

『今晩は。』互に挨拶した。德ちやんは人に見られるのが恥かしいやうに視線を避けた。けれども體のこなしは落ついてしら〳〵しく裝つてゐる。

『お父さんは？』お妻は長火鉢の向ふに坐つてゐる母親に言葉をかけた。母親の目は德ちやんを見てギロリと光つた。

『お母さん、今晩は。』德ちやんは一寸しなをして頭を下げた。電燈の光で銀杏返しの亂れたのや、積つた埃や、安ッぽい根掛まで母親は見て了つた。开してよくもづう〳〵しく來られたものだと言つたやうな顏つきをした。それでも聲は愛しく「入らつしやい。」と何事をも知らぬものゝやうにいつた。

お妻は德ちやんを二階に呼びあげた。そして小聲で半金の五十圓だけ預つて置かう、「お父さんがゐなくッては話も出來ないから。」と譯を言つて

『明日晝間來てお呉んな、夜はやつぱし縁起をいふものだからね、明日是非來ておくんな。』斯う念を押した。

德ちやんは「さうねェ。」と云た儘返事をしない、暫らく懷手して考へてゐた。

『都合が惡くッて、そんなら明後日にしてもいゝわ。』德ちやんは、これにも返事をせずに考へてゐた。

『二三日一寸都合が惡いの、今夜だといいけれど……。』

お妻は此言葉で德ちやんの胸をすつかり讀んで了つた。二三日都合が惡いといふのは屹度女中奉公にでも行くのだらう。今夜持てゐる五十圓の金といふのも前借して來たのだらう、それに違ひないと思ひ込んで了つた。が、そのことはどうしても口に出して言へなかつた。德ちやんの今の境遇は人事だと許り思へなかつた。何だか目の前に自分の未來が見えるやうな氣がした。たゞ「さう。」と輕く言つたまゝ煙草をふかしてゐた。

金は母親に渡した。德ちやんはお妻が「藝者屋の御飯も偶にはお食べな。」と云つて引とめたけれども、用事が殘してあるからと言つて歸つていつた。

お妻は母親から眞田の事をいろ〳〵と聞かれるのが蒼蠅からフィと外に出た。空には寒月が冴えてゐた。道は凍てゝ雪駄の音すら高く響く。

『眞田さんも好い人だが、お酒を飲むのが疵だね。飲酒家は女房の着物を剝いでも酒をのむが、下戸は女房の着物を質に入れて迄も餅を食はうとは言はないよ。』

お妻は母親が斯う言つた言葉が、深く心に刻込まれて、歸る道すがら物を案じて居た。母親の言葉は無理どころか、ほんとうにさうだとお妻はつく〳〵眞田の狂態を厭はしく思つた。けれども思つたゞけで別にどうしやうといふ氣は起らなかつた。

家に歸ると、隣座敷では先生を中心にして奥さんや子供が活動寫眞の面白さ、藪入の人出の多いことなどを話してゐた。玩具の笛の音なども聞えた。

眞田は酒を手酌で飲んでゐる。お妻は酒の匂を避くるやうにして入つて來た。眞田は突然「あッはッは。」と大きく笑ひつゞけた。

『何がおかしいの。顔に何かついてゝ。』

眞田はさもおかしさうに笑つた。

『どうだ、驚いたらう。』

『あァ、あの紙ぎれ！。』

『さうよ。』

『あなた、聞てたの。』

『始めッから聞てたんだ。』

『まァ、ちつとも知らなかつた。』

『德ちやんも驚いたらう。』

『えゝ。』

眞田は德ちやんの驚いた樣子を、お妻が面白く聞かせてくれるだらうと豫期してゐたのに、實際は張合のないものであつた。

彼は苦い顔をして酒を飲み出した。

二十二

眞田の周圍には色々の問題が迫つて來てゐた。鄉里の老父からの異見、朋友からの忠言、先輩の訓戒、それに金錢上の問題もうるさくなつてきた。けれども彼はそれ等の事に關した郵便物は封筒をみた許りで捨てゝ了つた。彼は歡樂の境を惡魔に覗かれるやうに恐れてゐた。

お妻は眞田の素振で、自分のために面倒なことが持上つてゐることを悟つてゐた。なんぼ考へてもきつぱりした結末はつかないから、いつそ目を瞑つて別れて了はうかと思ふこともあつた。が、それがまた不思議にのびゝしてゐた。——眞田はお妻が斯ういふ悲しい思ひに惱んで居ることを知つた時には、愈酒に浸つて、しらふの時は殆どないやうになつた。

今日も西紺屋町の雜誌社を出て、銀座通りの夕暮をぼんやりと辻に立つて見てゐた。彼は酒が醒めかゝると體のどこかに穴洞ができたやうな氣がする、今も節々がだるく、肉と肉とがたるんで、そこに瓦斯が溜つてゐるやうに思はれる。——彼は大きな欠伸をした。夕暮時の雜音のなかに、疲れた肉の瓦斯を暢氣さうに吐いたことが、一種のおかしみを思はせたが、「酒でも飲まう、血のめぐりを劇しくせねば、肉がぐたゞになつて腐敗しさうだ。」直ぐ斯う定めて續いて出る欠伸を嚙殺した。

彼はそれから路次を入つて、「正宗」の軒燈の點つてゐる家で酒を飲んでゐた。盃を忙しく口にしてはふうと大きな呼吸をする。醉が廻ると下唇が微に痙攣する、と上齒で壓へて考へ込む。——彼は醉ひどゝちになな

つた。停滯してゐた血はいみじき音を立てゝ循環しながら頬りに心をそそり立たせる、が、沈み込んだ心は冷やかに笑つて許りゐるやうで、腹のどん底から溺酔して了へなかつた。

『ウヰスキーだッ。』彼は强烈な酒で、覺めた心を燃し、眠りこけてゐる臟腑を燒き爛らさうと思つた。――で、銀座の通りに出た。軒並の瓦斯や電燈の光は霧が下りてゐるやうに、ぼんやりと浮いて見ゆる。酔つた彼の目には忽ち赤い軒燈が映つた、そこには火のやうな酒があり、心を湧き立するやうな繪や樂器や美人があり、心を喫茶店で酒ばかりを賣るうちではなかつた。それでも彼は椅子に腰を掛て「何か斯う强い酒、カァッとするやうな。」手を廣げたり苫めたりして形容した。

ウヰスキーは小さなコップに盛られて、白いエプロンを掛た女の手で運ばれた。邊りには洋服を着た客ばかりゐた。そして各自勝手な話をしてゐる。彼はひとり飲んでひとり考へてゐた。やる瀨ない思ひはいろ〳〵の象になつて、心を泣かせたり、怒らせたり、笑はせたり突ころばしたりする、が、どう心を弄ばれても、直ぐお妻と別れやうとは思へなかつた。自分は若いといふ誇りはあるが、今お妻を失ふといふ事は、莫大な勞力の結晶を失ふ心地がする、そして精力が消耗し切つて、また改めて他の女を我ものとするまでには、もう精力の餘剩がない、ながい間心を碎いて斯うなつた仲、どうしても〳〵離れたくない。――

彼はフト自分の心を離れて視た。何といふ淺ましい心だらう、あの女に對しての戀は、褪かゝつてゐるではないか、これまでの勞力が惜しいから離さぬといふは、何と淺ましいこゝろだらう――巴に廻るふたつの心を亂れ亂れて心の灯は消えて了つた。くらやみで刃がひらめき、血が迸る、肉は凄じい力にすくんだ。

『ウキスキー。』彼は咆るやうに叫んだ。給仕女は驚いて此方をみた。彼は口を利くのも面倒臭いやうに、人差指を出した。女は笑つてうなづいた。

――ピアノの音が聞ゆる、斯う思つたが夫れは喫茶店であつたか、そこを出て聞いたのであつたか覺えてゐない。今の沈んだ心を浮たゝせるには、餘り高調で輕快であると思つた事を覺えてゐる。

――電車に乘つたことも記憶にあつた。けれども何處ゆきの車であつたかは覺えてゐない。彼は電車の釣革に捕つてゐたが胸の裡は唯暗かつた、さうだ、――暗いといふ許りで、はつきりと言葉に現はせなかつた。唯こゝろは時化前のやうに、暗憺として黒い風が吹き荒んでばかりゐた。

――電車から降りた、雷門であることを知つた。仲見世の通りで女がショールを卷て歩くのに幾人も出逢ふ、ショールで口許を隱してゐる女は、どれもどれも美くしう見えた。――彼の双の腕は不思議な力が滿ちて、ふたつの蛇のやうに觸れたものは皆卷きたいやうに燃えてゐる。

二十三

眞田は、獸のやうに仁王門を走りぬけた。彼は觀音堂に何の幻覺を認めたのか、敷石の上を一直線に走つた。

暗い夜である。彼はふゥ〳〵と荒い呼吸をしてゐる。怪物のやうな銀杏樹は闇の中で鳴つてゐる。頭の上には大きな獻燈がブラ下つてゐる。彼は階段の上に立つて、あへぎながら荒い呼吸をしてゐる。――幻覺はぱつきりと言葉に言へない、何かしら光つてゐる。女？をんなでもない、賽錢箱のなかにカランと投込む錢の音に、何かの意味が聞かれさうに思へる。が、それでもない。何かしら光つてゐる。黑い風が颯と吹いてくる中で、何かしら光つてゐる。火だ！

闇のなかを、すがめみたが、ぼんやりとしてゐる。火ならとろ〳〵燃えてゐる蠟燭の火だ。黑い風の中にぽうッと浮いてゐる。交番の火は闇に赤い。

『幻覺々々、べらぼうな、俺の頭腦をどうしやうてンだ。』

彼は下駄を鳴して廻廊を歩いたが、やつぱり火はぼんやりしてゐる。

『糞ッたれ奴、俺の頭腦をどうしやうてンだ。』

賽錢箱の上に腰を掛けた。仲見世の火はふつ〳〵と消えて了う。黑い風が吹く。ざァ〳〵と樹が鳴る。ぐうし〳〵と鳩が夜鳴をする。

彼は荒い呼吸をつゞけてゐる。炎を吹いてゐるやうだ。火山のやうだ。

ふうゥふゥと腹のどん底から火を吹く。

ぼんやりと火が暗に浮ぶ。金粉を空に吹いたやうに、キラ〳〵として、夫れがぼんやりとなる。麻醉劑を嗅いでゐるやうに、キラ〳〵してはぼんやりとなる。

『ちゑッ。』彼はガタンと廊下に音をさせて飛下りた。黒い風が颯と吹く、左手には賽錢箱に納めてあつた女の長い髪を掴んでゐた。さつと風が吹く、髪の毛は蛇のやうに一本々々ぶる〳〵とそよぐ。

『毛を焼け、毛の臭ひをさ。』さつと髪を投ると、暗に消えた、火はぼんやりとしてゐる。幻覺のなかに、まざ〳〵と長い髪の毛がみゆる。人を焼く臭ひが漂ふ、黒い風が吹く。

——ぼんやりとしてゐる。煙草箱がみゆる、脚氣で死んだ旅の青年がみゆる、朝鮮の野原がみゆる、火葬場がみゆる、マッチがみゆる、めら〳〵と石油が燃える、たら〳〵と流れて柩の上を燃える。「七十五日生き延びるンだ、煙草を此火でのめ！。」といふ嗄れた聲が聞ゆる、——ぼんやりとしてゐる。その中にくん〳〵人間の焼ける臭が漂ふ。——

『馬鹿者！、何といふつまらぬ頭腦だッ、何を考へてる、馬鹿者ッ。』

——ぼんやりとしてゐる。上總の海邊がみゆる。雨がざァ〳〵と降つてゐる、闇夜だ、遠く白い海が見ゆる、波の牙が闇に光る、薪が組まれる、箱がのる、人間が入つてゐるのだ。石油——

『何を馬鹿な、馬鹿なことを。』

——ぼんやりとしてゐる。雨の中で柩が燃えてゐる、ぼうッと火の手があがる、川向ふで人聲がする、卵塔場がぱッと照し出される、人間の燒くる臭ひが漂ふ。

『どうしたンだ、頭腦(あたま)ッ。』

——ぼんやりとしてゐる。自分の肉を自分で燒てゐるのだ、自分の肉の臭ひがする、酒の燒ける臭ひがする、雨が降つてる、とろ〳〵と下火になる、しゆつ〳〵と火が消える、灰の中に白い骨がみゆる。

『腑ぬけ奴、何を夢みてるンだッ。』

——火はぼんやりとしてゐる。黑い風が吹く、樹がわめく。——黑い鳥が幾萬羽ゐるだらう、海の上を一ぱい飛んでゐる。波は白い牙をむいて咆えてゐる。黑い鳥は空を蔽うてぐる〳〵飛び廻つてゐる、黑いなかに仄白い色が漂うてゐる。白骨を納めた甕がある、砂の上にぐんなりしてゐる男がそれを抱てゐる。その男が自分だ。——

『ちゐッ、馬鹿な、な、なにを考へてるンだ。頭腦ッ。』

——ぼんやりと火がみゆる。彼はひよろ〳〵する體を踏とゞめては、荒い呼吸をつゞけてゐる。肩から搖すつて大きな吐息をしたり。う、う、う、と唸るやうな聲を出してゐる。

——闇の中で、石をぶッつけたやうに鐘がカーンと空鳴りした。彼はふッと醒めたやうに首をあげた。廻廊にカタ〳〵と下駄の音がする、凍てた空氣にヒビが入るやうな音だ。

——ぼんやりと火がみゆる、はッ〳〵と彼は息づかひ荒く廊を曲ると、提灯の火がみえた。そして闇のなかに大きな坊主頭が浮かんだ。彼は獸のやうにガタガタ階段を下りて駈け出した。

——幻覺はまだ目の前にある、ぼんやりと火がともつてゐる、彼は獸が火を恐るゝやうに、目を瞑り體をすくませて駛つた、黑い風が吹くなかを西へ西へと走つた。

二十四

雜木の間を突ぬけた。はッと目の前に白光(しろびかり)がする。池だ。橋の上を走る、はッ〳〵と吐く息が白い。彼の目は獸の目のやうに血走つてゐる。動かない、燃えてゐる。

底冷のする空氣の中に肉の臭ひが漂ふてゐる。人間の蒸れる臭ひと燒ける臭ひとが頭のなかで混闘してゐる。肉の聲が潮のやうに寄する、その中を獸のやうに彼は走つてゐる。はッ〳〵と白い息を吐いて一目散に走つてゐる。

——まだ走つてゐる、軒並の軒燈がチラ〳〵と走る、ちゆッ〳〵と鼠鳴きの聲が八方から雨のやうに降る、白い顔がチラチラする、やつぱり、彼は走つてる。

『飛脚屋さん！』

こんな冷笑も彼の耳には入らない。走りつづけて明るい通りに出て、

また暗い路次の中に走り込む。ナラ〳〵する火の數は殖える、ぐる〳〵曲り曲つて迷宮のなかを走りぬけるやうに、はッはッと息を切して走つてゐる。

道の兩側には、肉の塊が幾つとなく蠢いて、狡猾な手段は色々に施されたが、一つとして彼の視聽を惹くものはない。彼は馬車馬のやうにひた走りに駛つてゐる。

『ちよいと、あなた！』

奔馬のやうに荒びてゐた彼は、むんずと組まれた。目の大きな白い顔が頰に觸るゝまでに迫つてゐた。そして冷たく凍つてゐる手は温かい柔かい手に握られてゐる。

彼は口も利き得ない、はッ〳〵と俎上の魚のやうにさも苦しさうに呼吸してゐる。それでも彼は足や手をぶる〳〵と慄はせて、まだ走つてゐる氣持で居る。額際は汗に濡れてゐた。

『あなた、何を急いでるの。』

『遊んでいらつしやいな。』

『ね、ちよいと。』

『いゝでせう、ね、あなた。』

いつの間にか白い顔は幾つも殖えて彼を圍んだ、そして手をとり、肩をとり、腰の邊りを押すやうにして誘惑した。

彼ははッ〳〵とまだ息をついてゐる。そして此光景を不思議さうに默

つて眺めてゐる。頭のなかは混濁して何も筋道のたつたことは覺えてゐない。たゞ息のみ苦しさうについてゐる。

『さ、入らつしやい。』

『まあ、此動悸！、どうしたの。』

『あなた、しつかりおしよ。』

白い顏と溫かい肉聲は彼のまわりを包んで了つた。彼は大きい荒い呼吸をするときに、女の肺から出たあたゝかい息をしたゝか吸つてゐる。

『ちよいと、可愛いゝ顏をしてるよ。』

『話があるッてばさ。』

『ね、いゝでせう。』

白い顏は彼の體に溫かい手を觸れて巧妙な挑發の術を施す。けれども彼は未だけろりとして息を吐いてゐる。

『どれつたいね。』

女は彼の手をグィと引いた。あたりの女は彼の尻や背を押して、格子戸近く抱き寄せた。

『馬鹿ッ、何をするンだ。』

肺の裂けたやうな聲に女だちは手を放した。彼は拳闘家がするやうな身構へをして、女の顏を見つめた。

『いゝぢやないの。』――女は呟くやうに言つた。「ちゑッ。」或る女は舌打した。彼は何と思つたか、肩を搖すつて「わッはッはッ」と高笑ひし

た。

『ちよいと、狂人だよ。』

女の聲は徒勞を自ら慰むるやうであつた。彼は耳に針を吹込まれたやうにくわつとした。

『きちがひ、畜生ッ、誰が？。』

格子のうちから白い顏が尖つた口をつき出した。

『お前さんさ、色きちがひ。』

彼の頭は冷水を浴びたやうに慄然とした。そして腕を拱いてぼんやりとして突ッ立つてゐる。暴馬が去勢されたやうに。

『きちがひさん、どうしたの、走つて御覽、それオ一ナ二ッ。』——女たちは聲を合せて笑つた。

彼の炎のやうな頭は氷塊のやうに一時に冷え切つて了つた。體内の血も次第に凍つてくるやうな氣がする。彼は非常な疲勞を覺えた。ぐんなりとして路次のなかを歩き出した。

後から頻りに女の嘲笑ふ聲が浴びせかけられた。彼はたゞ默然として歩いて、銀座を出てからのことを樣々に考へてゐた。が、どうしても其緒(いとぐち)は索められなかつた。

漸う通りに出た。寺の前から折れて暗い道をとぼ〳〵と入谷の方に歩いた。そして次第に惡感(をかん)を覺えた。

二十五

お妻は坂本の通りまで、氷を買ひにいつて歸つて來た。昨夜から吹き荒んでゐる空ッ風は、泥溝に薄すら張つた氷を片隅に吹寄てゐる。

眞田は蒲團を頭からすつぽり被つて寢てゐた。

『あなた、冷しませう。』――斯う云つたが返事がない。「あなた！」お妻はそつと蒲團をあげて覗き込んだ。眞田は目を開いたまゝ、じつと見つめてゐる。

『まァ、眠つてやしなかつたの、开麼恐い顏をしてさ。』

やつぱり返事がない。廣い額には熱くさい汗が浮て、顏の色は青かつ

た。

それからお妻は氷を手拭に包んで眞田の額にのせた。手拭の端に「松の家小妻」と染られたのがみゆる。彼が新橋に出てゐた時の手拭で、今ではこれ一本しか殘つてゐない。が、別にこれをみて何等の感傷も起らないやうであつた。

手拭を搾つては冷した。火鉢を遠ざけてゐるだけに、胴ぶるひがして手が凍える。時々額に手を當てゝみたり顏を覗いたりした。が、いつも眞田は瞬きもせずにどこかを見つめてゐる。

お妻は昨夜の事を思ひ出すと、今更のやうに、不安の念に襲はれた。珍らしく歸りが遲い、また酔つてどこかに引かゝつたのだらう。寢よう

とは思つたがモウ歸りさうな氣がしてしようがない。それからそれへと眞田が飲んで廻る先々が考へられる、何となう妬ましいこゝろが萠す、さうなると癖の、輕い頭痛がして氣が焦々する。

——すうッと戸が開いたと思ふと、人の影がぼんやりみえて、そこにバタリと倒れた。風のやうに何處から入つて來たか判らない。眞田が入口に倒れてゐる、身ぎ起して座敷に入れると、ぼんやりして、ふら〳〵と障子に倒れかゝる、着物が障子に觸れてさら〳〵と紙が鳴る、後を締めてゐるうちに障子の向ふにすッと出て、黑い影がゆら〳〵したと思ふ途端に、硝子の破るゝ音。

——はッと思つて出てみると、眞田は便所の硝子窓に頭をブッつけて其のまゝぐたりとしてゐる。お妻の心は顚倒して了つた。

寢かせてみると、頭は不思議にかすれた創もない、が、可怪しい、眞田は眠るでもなく覺たでもなく、目を開けたまゝでゐる。「今朝まで目を開けたまゝかしら」と斯う思ふとお妻はぞつとした。

『俺は狂人か、お妻。』——たつた一口斯う云つたばかりで目を開けてゐる。それからいつの間にかうとうとして今朝目を覺すと火のやうな熱だ。

目は血走つて、瞳がこゝろからか曇つてゐる。そして額の筋や目の端が、ぴくり〳〵と痙攣するやうに波をうつてゐる。お妻は始めのうちは氣にも留なかつたが次第に夫れが恐ろしくなつてきた。「もしも此まゝ重い

病氣になつたらどうしやう。」――斯ういふ懸念が頭を持上げてきた。流行唄ではないがところも知らぬ名も知らぬ全く路傍の人だ。たゞ斯うなつたばかりで、どこの生れか、田舍ではどんな生活をしてゐるやら、聞たこともなければ是まで聞かうと思つたこともなかつた。戸籍しらべが來ても自分は逃げ廻つてゐたが、彼の時でも原籍を聞いて置かうとも思はなかつた。――こんな恐怖は次第に擴がつて、小さなこゝろを脅かし始めた。

終日頭を冷し乍ら、こゝろはをのゝいてゐた。一寸外して前の兄さんのところへ相談に行かうと思つたが、眞田はやつぱり目を開けてゐる。閉ぢたから眠つたのかと思へば、また開ける、开しては白い眼をする。

夕飯の仕度がてら漸う前の家にいつた。

『ゆふべ遲かつたやうだね。』――主人は唐獅子の置物の仕上げをしてゐた。

『えゝ、そして今朝から少し惡いの。』

『どこが？。』

『熱が出て――。』

『のみ過ぎだらう。』

譯もなく斯う言はれたのが、何だか輕くみられてるやうで口を利くのもいやになつた。が、社の松原さんに遊びに來るやうに、と思つて兄さんに葉書をかいて貰つた。この葉書を出すには「眞田を慰める事。」と「松

原さんなら病氣の樣子をみて何とか心配してくれるだらう。」といふ意味と「そんな事はあるまいが萬一重くなつた時には手を借ねばならぬ。」といふ三ッの望みがあつた。それでも葉書には病氣で寢てゐるから遊びにゐらせられ度――と何の事もなう書かれた。

お妻は、頭を冷しながら又一夜をおづおづ過すことが氣になり乍らも歸つた。

夕日がうつすら窓の障子を透して、恐ろしい眞田の顏に淡い陰影を漂はせてゐる。

二十六

翌朝は早くから目を覺してゐた。そして何かしら瞑想しゐる。

『モ少し冷しませうか？』お妻は腫れぼつたい目をしてゐた。

『いゝよ。』――『酒が飲みたいね。』

お妻は危い？といつたやうな目をしたが、眞田がけろりとしてゐるので爛の用意をした。

社の松原は正午過てからやつてきた。

『君は病氣ッてぢやありませんか。』黑い漆のやうな長い髮や、常に燃えてゐる目は感情に滿ちた氣性を思はせた。

『なァに、なんともないよ。』

『だつて、顏色が惡いですね。』

『飲みすぎさ。』

お妻は松原に目配せした。さも恐ろしいことが迫つてゐるものゝやうに。

それから暫らくして酒を飲んでゐた。松原は杯を持つてはぐいッと眞田の顔色を見てゐる。眞田はたゞ苦い顔をしてはぐつと飲んで、开してはふうと息を吐く。

お妻は火鉢に手を翳してぢッとしてゐた。灰が白くなると炭をついでは手を翳してゐる。荒た手にもあぶらが滲み出てゐた。

海丹の鹽辛があつた。ふたりはそれを殆ど舐め盡した。が、やつぱりぐびり〳〵飲んでゐる。松原はいさゝかの酒にも醉つて、まつかになつてゐるが、眞田の顔をぬすみ見るやうにしては、お妻の顔を見て默つて居る。お屋敷の方で烏が啼く。

『いやだね、烏が……。』お妻は眉を寄せた。こめかみには頭痛膏を貼つてゐた。

『さらひですか？。』

『だつて、人が死ぬる日に啼くッてぢやありませんか。』

また沈默がつゞいた。前の家では佛像の荒彫でもしてゐるのか、鑿を叩く槌の音が聞ゆる。これに交つて長屋の外れの家で、安下駄の表を打ぬいてゐる音がする。裏の植木屋の堀井戸では寒いのに洗濯をして居るのか、その音までが森閑とした座敷に聞ゆる。

『おゝ、けふは死刑のある日ですよ、十二人の！。』
『死刑ですッて、だから烏啼きが變なのでせう、ね、あなた。』
眞田は默つてゐた。
『死刑――といふと何となう、いやァな氣持がしますね。』
『さうですね、全く！。』
眞田は俯向てゐる。
『とう〳〵今日か、しばり首は。』漸う口を利いた。
『さうです、午後二時から始めるさうですから今頃はやつてるンでせうよ。何しろ十二人つゞけるのですからね。』
眞田はそれッきり口を開かなかつた。不味さうに酒をのんでは、伸び

た髪をがし〳〵搔いてゐた。
彼の頭腦のなかは、一ぱい血糊が擴がつてゐた。朝鮮を放浪してゐた頃、見たところの慘酷な死刑の光景が、まざ〳〵と見えてゐるのだ。然し彼は別に氣持が惡いとか、それを追想するのが不快だとか言ふ氣分は少しもなかつた。それどころか却つて「血を見てから〳〵と笑ふ。」といふ凄い光景を胸に描いて、之れに詩的な色彩を施して、口から迸る火のやうな言葉で、この心もちを歌つてみたい位であつた。
――一度は京城動亂の際、暴徒が斬られるのを見た。血煙、悲鳴、日本刀、白い目、土色の顔、そんなものが皆ピク〳〵と目の前に生きてくる。

――一度は海賊の死刑。狹い小屋、不細工な踏み臺、丈夫さうな釣紐、それによぼ〳〵してゐる白衣の囚人、號令、陷脚、苦悶、斷末魔、目、口、鼻、手、指、爪の色、痙攣、――これが瞬間の一切で、まざまざと胸の裡に蘇へつてくる。聲のあらん限り、臟腑がちぎれる位大きな聲で「はッはッはッ」と笑つてみたい。

杯を置いた。

『僕は何だか變だらう?。』冷笑が口のあたりに見えた。

『變ッて、別に――ですが、何か心配でもあるンですか?。』

『自分で變だと思ふよ、頭が變になつたやうな氣がする。』

『それは神經ですよ、神經ですとも。』

『そんな事を云つてごまかしては駄目だよ。確に變だ。自分のする事が總て分らないからね、變だよ。何も彼も!。』

松原は默つてお妻と樣子をみてゐる。

『變だよ、何の爲めに恁麼生活をしてゐるか、夫れが疑はしい。どうかしてるンだ。然し开麼事より新聞を讀んでゐても活字が皆誤字にみえるね、見馴た字でも何だか違つてゐるやうに思はれるのだ。違つた字を斯う組合せたやうに何だか變にみえる。』

また沈默。――

『變だよ、どうも、然し未だ僕は正氣でゐるンだ。自分の冷やかな心を呼び起して、熱した心を押へつけるだけの餘裕があるンだから。』

沈默。

『が、自分の心を自分で變だと疑るのはいやだね、西洋の小説だつたか、自分の精神を疑つてゐるうちに遂々狂人になつて了ふ恐ろしいことが書てあつたぢやないか。君、僕は未だ確だらう。はッはッは。』――かすれてはゐたが大きく笑つた聲は、お妻の暗い胸を震はせた。

二十七

『君、何もさう、煩悶するやうなこともないぢやありませんか。』

『無論ない。――不思議だらう、他人が不思議がるのは無理もないさ。僕自身が既に不思議だと思つてゐる位だ。血だね、血の色が君達と違つてるンだね。』

『冗談言つちや不可ません。そんな事があるもんですか、君は餘り酒を飲んで熱するからさうなんですよ。』

『熱する？……いゝぢやないが、僕は熱して熱してうんと熱してみたいね。――まァいゝさ、僕は詩に耽つて死ぬるンだ、何も彼も詩にしてみてるンだ。自分も詩の中の人間と一緒に同じ色に塗つて了うのだ。嬉しかァないか君、さうは思はない？ゑッ、君。』

『思ひます。が、僕と君とは同じ年輩でもモウ今では水平線が違つてゐる、君は僕より總ての色が強いのです。經驗が何事にまれ僕より多い。僕は未だ赤い色だ、君はモウ紫になつてゐる。僕は婦人といふものを未

だ解してゐないのです。況んやくらうとに就ては、三味線の調子が合つてるのやら違つてるのやら、それすら判らない位です。』

『君はなんだね、此女と僕が一緒にゐるから買被つてるんだね。』

『さうでもないですが、兎に角君は羨ましいよ、奥さんの前だが……。』

眞田は發作的に手を振つた。

『よせ〳〵、よせッたら。何が奥さんだよ。そんな話はやめ。女といふものは弱いものさ、いつも慄へてばかりゐるンだ。此女をみたまへ。いつもをど〳〵してゐる、僕にも縋れないンだ、ひとりにもなれないンだ、毎日々々、前を見たり、後を振返つてみたりして暮してゐる。これで一代きよと〳〵と前後を見廻してばかりゐるンだね。女てェものは變なものさ。あァあ、變なものばつかりだ。寧そ變なものでもウント飛びぬけて變になると氣樂だらうよ。ねェ君、飛びぬけて狂人にでもなつてみたまへ、よつぽど暢氣でいゝと思ふンだ。』

眞田の言葉には一種の調子があつた。すら〳〵と言つたり、どつしりと調子を下したりした。これが役者の聲色と變つて、力が籠つて潑溂として生きてゐた。

『君、もう止さう。奥さんが心配してをられるから。』

お妻は、さつきから頤を襟に埋めて沈み込んでゐた。が松原が斯ういつた時には首をあげてにッと笑つた。「いつもの傳ですよ。」といつたやうな目で笑つた。

――が、今眞田が自分のことを「前を見たり後を見たりして日を送つてゐる。」といつたのは、自分の今の心持をすつかり言ひ現はされたと思つた。と同時に斯うまで自分の心は、彼の人に見透かされてゐるかと、感覺の鋭いのに驚嘆した。そしてモウ自分のこゝろも體もすつかり彼の人の前に放り出して「煮るなと燒くなと。」と覺悟を定めねばならぬ時が近付て來たやうに思はれた。

――が、眞田の顏色が氣にかゝる、目の色が心配である、よく見てゐると、どうも樣子が變だ。が、一緒になる始めから何事も他人と違つて調子が變つてゐた。變だと疑ひ始むれば其時から疑はねばならぬが、彼の人は生れた時から恁麼だつたかも知れぬ。――斯うも自らこゝろを慰めてみた。

それから沈默が又つゞいた。眞田は松原がゐないものゝやうに、ひとりで酌をしてはひとりで飲んでゐる。

いつもくる飴屋が、今日もちやるめらを吹いてきた。門外で子供がばたゞと駈集まる音がした。

『何か變つた話でもありませんか。』松原は眞田の顏をチラとみた。目が暗く濁つてゐるのを認めた。『氣焰でも？。』

『ないよ。』――『また女の話が聞きたいンだらう。』

『女の話でも結構です。今朝も社で暖爐會（ストーブ）が賑つたのです、女ッてものは意氣地のないものだッてね。始めのうちは熱心だが、さァ女から一緒

になりませうと持掛けてくる段になるともう占めたもの、お針が出來ない、文字がない、臺所が出來ない。では暫く見合せて勉强せねばといふ事になる――と斯う△△君が言ふンです。話は女中と或男との事から出たのですが、全體女てェものは开麼ものでせうか？。僕は恁麼經驗が更にないからまァ事實と思つて聞いてゐました。』

『まァ开麼ものだ。然しそれは極めて淺い經驗から覗いた女の心理だね。僕なんか斯う思つてゐる。女に姙娠といふ制裁がなかつたら、女はモット淫奔で獸のやうだと思つてるね。僕はさう信ずる理由を澤山持つてる。』

『こいつァ面白い、聞きたいものです。』

『然し話すのは下らない、たゞさう考へてる方が僕は興味がある。』

『すると何ですね、女は男より淫奔だから、天が姙娠といふ重荷を背負はせて、いくらか制して居るといふのですね。』

眞田は發作したやうに笑つた。

『君は新聞記者みたいだね。僕の話を釣出しにかゝつたンだね。僕の興味を窃まうとするンだね。――が、無理はない、女の話ッてェものは誰でも聞きたいものさ。』

お妻は眞田の言葉に、いくらか生氣が仄めいたのを喜んで聞いてゐた。

『釣出されたとしてまア話さうこう。話さうが僕は理窟はヌキにする、興味のある話を理窟に當て箝めるのは實に不愉快だ。僕が言つた姙娠の制裁も、君が言ふ天が女に授けた重荷とやらも、みんなヌキにしやう。开して唯の茶話として聞き給へ。君はまたさういふ氣分で聞てゐられる人だと思ふ。』

松原は目の色で納得したことを語つた。

『ね、一切理窟ヌキだ、僕が思ひ出した儘話した事が、僕の所謂信ずべき理由となつてゐたら偶合とも言へやうし、合つてゐなかつたら又別の意味にも取れやう。要するに芳烈な詩情を殺がないやうにお互ひに力めやう。感興に生きてゐる我々だからね。』

眞田の目は耀いてきた。調子も熱を帶びて、側にゐる松原もお妻も目に入らぬやうであつた。彼は胸の奥に濃く釀された酒が、溢れ出るのを堰き止め得ぬもののやうに、滑らかに語り出した。——目の前には廣々とした遠州灘に臨んだ或る海岸の月夜が見えた。

『夏のことさ、東海道を旅行して或る宿に泊つた。海岸で波が荒かつた。晝間は酒を飲んでごろ〳〵してゐた。暑かつたからね。女中がゐた、ふたり、一人は金の入齒なんかして一筋繩では行かない奴だと直ぐ睨んだ、ひとりは十六七で一寸可愛らしい娘だつた。金齒の奴は果してしたゝかな者さ、東京は知らないやうだつた。然し人を食つてゐたね。その女が酒の相手をしてはおかしな目をするんだ。僕は金が欲しいのだらうと思つ

たが樣子をみてゐるとドウもさうでないらしい。僕は酔つてるンだらう。冗談も言つたさ、すると女は思ふッボに箝つたやうに笑つてた。其時に「女は姙娠することが恐ろしい」――といふやうな意味を聞いたのだ。僕は醒めたね。何だか不快になつて了つてフイと外に出ると、モウ夕方で漁師が船を濱に引あげてゐる頃だつた。涼み臺の下に立つてゐると、小娘の方が來て言ふには「金齒さんには用心遊ばせ、大變な代物ですから。」と斯うなんだ。變なことをいふと思つて訊ねると姙娠してるといふンだ。「若し惡戯でもなさつたら塗りつけられて大變ですよ。」と濃厚な表情をした。僕は「ふうむ」と云つたまゝ又座敷に歸つた。金齒はゐなかつたが、僕はァ、よくも際どいところを免れたと思つたね。月が出たよ。いゝ月だつた。遠州灘だから波が荒い、それに月が山の端からゆら〳〵上つたのだ。そこへ又金齒がやつて來て話しかける、不愉快で堪まらない、無愛想な返事をしてゐたが却々引退らないンだ。そして揚句には「あの小さい娘ね、あれはしたゝか者ですよ、全く！。」と斯うなんだ。僕は狸奴何を言ふンだと思つた。貴樣は俺に腹の子を塗りつけやうたッて、〳〵ンン田舍ののろい男のやつな頭ぢやないンだ、生馬の目を拔く都會の空氣を吸つてる男だよ、と斯ういふ誇があるから、小娘の惡口も金齒が見透いた僞を吐くやうに思つて却つて厭はしく思つた。――濱に出た、さつぱりしたいゝ氣持だつた、詩人なら波の音樂と松風の合奏とか何とか美しい文字で飾る景色だ。僕はうつとりとしてたンだ。靜かな夜だつたら美

しい貝が生れる――といふ聯想があるが、靜かな空氣の中に波の荒い響が漂ふてゐるのだ、何とも形容の出來ない夜だつた。渚に立つて小聲に何だつたか唄つた、すると僕の手にそつと觸れたものがあるンだ、見ると女ぢやないか、金齒は光つてゐなかつた、色の白い小娘なんだ。――由來僕は色の白い女は厭ひだ、何だか恐ろしくてしようがない、白粉を塗つて白いのなら我慢もするが、生地から眞白いのは御免だ、凄くて慄へ上つて了ふ、肌に觸る氣にはなれない、白い肌にぷつりと針を突刺たら、眞紅な血が出さうに思へないンだ。何故かさう思へない、何だか血が出ても玉虫色をしたやうな、京紅のイヤに光つてゐるやうな血が出さうに思はれてゾッとする。だから色の淺黑いのを親しみ易いと思つてゐるが、此夜も小娘が眞白いので氣味が惡くなつて了つた。四邊の光景が美しい中に白い女が立つてゐると、凄くなつてぢッとしてゐられないンだ。――僕はぶら〳〵歩き出した。小娘は後れ勝だが何とか云つては僕の側に寄つてくる、そればかりでなく僕のこゝろを浮立たせるやうなことをいふのだ。それが巧妙なンだ。金が欲しいやうでもない、たゞ僕の歡心を買ひたいやうなンだ。僕はところも知らぬ名も知らぬ旅の人なんだ。それに女が節操を許さうと焦つてゐるのでないか、僕は冷靜に其心理を見やぶらうとした、冷靜？さうだ、冷靜だつたが夫れは明かに言へば、白い肌が凄かつたから强て冷靜になつたので、さうでなかつたら或はどんな事になつてゐたかも知れない。――僕は此月夜を何とも言へな

い恐ろしい女の力に脅迫されて、経驗した事のない一種妙な感興を催して過したのだ。――小娘といふのは宿の遠縁の者で、監督の厳しい下に働いてゐたのだ。』

杯の酒は冷えてゐた。

二十九

『ふゥむ、面白い、僕なんか何日そんな實際に觸れることが出來るか、待遠しいやうな氣がします。僕は或る宗教家から斯ういふことを聞きました。それは「性慾と節操」といふのが話題だつたと思ひます。その人がいふには性慾は天慾である、誰しもさうあるべきであるが、男子が女を矢鱈に弄ぶといふことは、決して正しい天慾ではない、女子が節操を守つてゐる以上は、男子とても慎み得ないといふことはない筈だと、意味はまア斯うなんです。すると何ですね……。』

『舍し給へ、理窟は言はない約束ぢやないか、さう多くの言葉を費やさないでも其解決はつく、性慾は天慾さ、女子は節操を守つてゐるとも。然し夫れは姙娠といふ恐怖があるから已むなく守つてるのさ、解答は夫れで澤山だ、自分は姙娠しないといふ確信があつてみ給へ。――多くは言はないが……。』

『だつて、人間といふものは強ち……。』

『舍し給へ、強ちも何でもない、僕の思想が人間として保つべき苦しい

約束から離れてゐるなら獣でもいゝ、まア聞き給へ。僕はこれまで妙な女にばかり出會した經驗がある。宿屋の女中風情だから、先刻のやうな事もあらうといふ人があるだらう。が、今度は令嬢だよ、身分のある人のお嬢さんなんだ。』

お妻は令嬢の話なんか初耳だつた。

『目の大きい令嬢だつた、髪は黒かつた、そして目と髪が誇だつたのだ。その令嬢と或る温泉宿で知合になつたのだ。それは春だつたね。菜種の花が一ぱい二階から見えてゐた――』

眞田は杯に手に觸れやうとしたが、強い恐怖に襲はれたやうに、さつと手を引た。

『舍さう。』

『どうして？。』

『舍す。――僕はどうしても事實を客觀して話す事が出來ない、直ぐ感情が内部に迫るから苦痛だ。』

ぐつと杯を乾した。

『平氣になれない、變だ、僕は人のやうに平氣で話せない、話してゐるうちに恐ろしくなつて了ふ、變だね。僕はいつも同化しやうとする冷やかな心を呼戻すのだ、开して力めて僕の熱して狂ふ心を壓へてゐるのだ。が、それは胸の裡でのことだ。口には出せない、口にしてゐるうちに同化して了つて、つい内部まで突込んで了ふ、だから苦しいンだ。』

お妻は着物から吹出る眞綿を取り乍ら聞てゐた。

『僕の現在の生活をみ給へ、小説ぢやないか、僕は今の心持を書いてみたいンだ、……　お妻！お前と俺と斯うしてゐる間の氣持が書いてみたいよ　お前の其きよ〳〵してゐる心持が書いてみたい、白粉やけの心持、縮緬皺の嘆きッてなものが書いてみたいンだ。が、書けない、書かうと思ふと苦しい　心ではしみ〴〵と其氣分を味はひながら文字にする事が出來ない、慘酷なやうな氣がする、痛ましい、切ない、そして恐ろしい、自分の肉を切きざむやうだ。』

彼は胸の邊りで五指を擴げては、さつと頭にやつて髪を掻拐るやうにした。此はきッと釣れてゐる。

『現實を曝露して、小説家なんてものはよく平氣でゐられるものだ、自分の肉を剝ぎ取て、ナイフで切つたり、つッついたりして食つてゐる、あれでおいしいだらうか、――厭だいやだ、僕はひとり胸のなかで小説を書てゐやう、悲しいも嬉しいも皆ひとりで味つてることだ。僕は人と一緒に笑つたり泣いたり出來ないンだ。現在此女とさへ心が離れてるンだもの。君、溝の向ふと此方とで、男と女とが惚たの突たのと言つて、いつまでも話してゐる心持を思つて見給へ。隨分淋いものだよ。が、そこに淋しい詩があるンだ。君、その氣分が味はへるかい、君。』

『……。』

『君、どう思ふ。』

お妻は眞田の手をとつた。

『あなた、およつてはどう？。ね、松原さんに失禮してさうなさい。ね、又頭が痛みますから。』

『あゝ、さうし給へ、寢て話をしたらいゝぢやないか。』

『ね、あなた。』くゝり枕を取寄た。

『いゝよ、何ともない、寢て何をするンだ。僕は眞面目に考へてゐるンだ。自分の事だ。』

『だつて又……。』

『寢ないッ、考へるンだ。』

彼の頭は火のやうになつてゐた。力めて冷やかに裝ふてゐるが、心のなかの熱火はお妻の目によく映つた。こめかみから、顏色から、呼吸から眉間の皺から。

三十

松原が歸つてから、眞田はお妻の膝を枕にして、際涯(はてし)ない思ひに耽つてゐた。

刺戟々と戀ひ焦れてゐた生活も、今では夫れが單調になつて、自ら强て刺戟さるゝ機會を作らねばならないやうになつた。それが如何にも不自然に思はれて、また心をそれ等に煩はすことに疲れを覺えて來た。

お妻と斯うして住んでゐる興味も、いつまで經つても濃くもならねば

淡くもならぬ、欠伸をしながらいつまでもいつまでも歩いてゐなければならないやうだ。ふたりの間に繋られてゐる溝も、どこまでいつたら橋があることやら。――

『變化！どうしても生活を一變しなければならない。さうせねば骨まで腐り込んで了ふ。』――斯ういふ決斷は、今直ぐにもしなければならないやうに思はれた。

『手を切らう。さうすれば生活上にも精神上にも革命がくる。そして新しい刺戟に觸ることが出來る。さうだ、手を切つて了ふに如くはない！。』――お妻と心から切れて了ふ氣はないにしても、暫くでも別れてゐたら、何も彼も新しくなつて了ひさうだ。芝居でも一幕やる氣で別れやう。『別れる時のお妻の顏がみたいものだ。泣くかしら、泣いた顏をしみ〴〵みたことがない。』――その泣顏をみるだけでも『お妻ッ、別れるぞッ。』と言つてみたくなつた。

――別れることゝなつたと假定する、その翌る朝、直ぐ酒を飲むンだ、別れる間際に泣顏はみたくないから、酒落の一ッも言つてポイと外に出る。それから何處に行かう。が、お妻が世帶をたゝむ時のこゝろはどうだらう。日頃手に觸れ目に見馴れてゐる道具を、前の兄さんのところへ運び込む時のこゝろはどうだらう。自分が外へ出たあとでは、いつものやうに煙草をのむに違ひない、それから鏡に赤い友禪縮緬の布をかけて埃のかからないやうにする、それからまづ何を運ぶだらう姉さん被りにし

て三味線や鏡臺や火鉢を運ぶときの光景はどうだらう。襷をかけて寒いのに荒た手にバケツや鍋釜を持つて、人目を憚るやうにバタ〳〵と前の家へ走り込むときの心持――それを思ふと迚も目に馴れた東京の風物をぢッとして見てゐられない。

漸う夕方道具を運び込んで了つて、それから疊の上に敷てある花莫蓙を捲つて、これですッかり片付た、――と斯う思つて、住馴れた座敷を見廻した時のお妻のこゝろ持になつてみたら、どうしても東東をうろうろしてはゐられない。

――お妻は其夜池の端の家に歸ることだらう、そして彼の二階で身の行末のことを考へるだらう。が、自分は斯麼ことを想像して氣を腐らしてはゐられない。さうだ、上野から汽車に乗らう。奥羽線でも海岸線でも信越線でも、どこ行の汽車でもかまはない、駈付た時に飛乗るンだ。そして車窓にもたれて醉ふことに力める、何も考へないやうにして、汽車が闇を衝て走る快味ばかりを味つてゐるンだ。

さうだ、上野でなければならない、新橋からでは空氣が餘りに明る過ぎて、その時の心持としつくり合はない。どうしても上野に限る、信越線だつたら妙義の奇景が見られるだらう。蕎麥が味へる、碓氷の隧道で咽返る、淺間が見える、そしたら張裂けるやうな大きな聲で「あゝ我友よ。」と叫ばう。高原の深い靄を吸はう。雪を戴いた高山を眺めながら、犀川を渡つて長野を流し目に信越の山峽に入らう。黑姫、妙高の靈山の